新潟県埋蔵文化財調査報告書　第243集

一般国道113号

鷹ノ巣道路関係発掘調査報告書Ⅰ

カヤマチ遺跡

２０１３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道113号

鷹ノ巣道路関係発掘調査報告書Ⅰ

カヤマチ遺跡

２０１３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 113 号は、日本海側と太平洋側を結ぶ総延長 232km の主要幹線道路で、地域の生活道路としても重要な役割を果たしています。現在の新潟山形県境付近の山間地域では、急カーブが多く幅員も狭いことなど安全面の課題を抱えています。また、交通規制時には迂回路が無いことから、沿線の地域に大きな影響が出ていました。地域高規格道路である新潟山形南部連絡道路は、これらの問題を解消することを目的として計画された自動車専用道路で、その一部区間として、鷹ノ巣道路（延長 5.0km）は事業化されました。

本書は、一般国道 113 号鷹ノ巣道路建設事業に伴って実施した、「カヤマチ遺跡」の発掘調査報告書です。縄文時代早期の遺物包含地を調査しました。

遺跡は荒川左岸の段丘崖の沢筋に立地し、遺構は明確ではありませんでしたが、少量の縄文時代早期の土器と 100 点を超える石器が出土しました。関川村では初めての本格的な縄文時代の発掘調査となりました。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に際し、多大な御理解と御協力をいただいた関川村教育委員会、並びに地元の方々、また、発掘調査から本書の作成まで格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本書は、新潟県岩船郡関川村大字片貝に所在するカヤマチ遺跡の発掘調査記録である。

2　調査は、一般国道113号鷹ノ巣道路建設事業に伴い、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。

3　埋文事業団は、掘削作業等を藤村ヒューム管株式会社に委託して発掘調査を実施した。

4　遺物の注記は、調査年度2012年の「12」と遺跡名「カヤマチ」にグリッドNo.･層位･取上げNo.等を併記した。

5　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は日本平面国家座標（新座標）のX軸方向を示す。

6　掲載遺物は、土器・石器の順で図版を作成し、通し番号を付した。本文および観察表・図面図版・写真図版の遺物番号はすべて一致している。

7　引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

8　平面図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。

9　本書の執筆は、佐藤友子（埋文事業団　専門調査員）、継　実・白井雅明（藤村ヒューム管株式会社　調査員）が行い、編集は継が担当した。執筆分担は佐藤：第Ⅰ章、継：第Ⅱ・Ⅲ章、第Ⅳ章1、第Ⅴ章、白井・継：第Ⅳ章2である。

10　調査成果の一部は、広報紙「埋文にいがたNo.81」・現地説明会資料等で公表しているが、本書の記述を持って正式な報告とする。

11　出土遺物及び調査・整理等に係る各種資料・データ類は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

12　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関、地元の方々から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

齊藤　準　　寺﨑裕助　　片貝町内会　　関川村教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　章 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 1

A　試 掘 調 査 …… 1

B　本発掘調査 …… 4

3　調 査 体 制 …… 4

A　試 掘 調 査 …… 4

B　本発掘調査 …… 5

C　整 理 作 業 …… 5

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 6

1　遺跡の位置 …… 6

2　地理的環境 …… 6

3　歴史的環境 …… 8

第Ⅲ章　調査の概要 …… 10

1　グリッドの設定 …… 10

2　調 査 方 法 …… 10

3　基 本 層 序 …… 11

4　遺　　構 …… 11

第Ⅳ章　遺　　物 …… 12

1　土　　器 …… 12

2　石　　器 …… 12

A　概　　要 …… 12

B　石　　材 …… 12

C　各　　説 …… 13

1）篦 状 石 器 …… 13　2）不定形石器 …… 14

3）剥　　片 …… 15　4）石　　核 …… 16

5）磨　石　類 …… 16

第Ⅴ章　ま　と　め …… 17

1　遺跡の性格 …… 17

2　石器の種類と分布状況 …… 17

3　不定形石器と剥片 …… 17

《要　　約》…… 21
《引用・参考文献》…… 21
《観　察　表》…… 22

挿図目次

第１図　鷹ノ巣道路と遺跡の位置…… 2
第２図　試掘調査トレンチ位置図…… 3
第３図　周辺の地形…… 7
第４図　カヤマチ遺跡及び周辺の遺跡 …… 9
第５図　グリッド設定図 ……10
第６図　石材別出土比率 ……13
第７図　不定形石器分類別出土比率 ……15
第８図　器種別出土分布図……18
第９図　石材別出土分布図……19
第10図　不定形石器長幅分布図……20
第11図　箆状石器･剥片長幅分布図……20

挿表目次

第１表　関川村遺跡一覧 …… 8
第２表　不定形石器分類表……14
第３表　不定形石器石材表……15

図版目次

【図面図版】
図版１　全体図
図版２　基本層序（1）
図版３　基本層序（2）
図版４　土器・石器（1）
図版５　石器（2）
図版６　石器（3）
図版７　石器（4）

【写真図版】
図版８　遺跡全景・箆状石器
図版９　調査前全景・近景・全景・完掘
図版10　完掘・遺物出土状況・基本層序（東西ベルト・トレンチ）
図版11　基本層序（トレンチ）
図版12　基本層序（トレンチ・南北ベルト）
図版13　土器・石器（1）
図版14　石器（2）
図版15　石器（3）

第Ⅰ章　序　　章

1　調査に至る経緯（第１図）

国道 113 号は、日本海側と太平洋側を結ぶ総延長 232km の道路であり、北陸地方と東北地方を連絡し、広域的な交通需要に寄与する主要幹線道路である。また、地域においては生活道路となる重要な道路である。しかし、新潟・山形県境付近の山間地域では、道路の線形が険しく幅員も狭いことなどから、安全面での課題を抱えていた。災害による交通規制時は、迂回路がないことから沿線の地域に大きな影響を及ぼした。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災では、日本海側と太平洋側を結ぶ道路として重要な役割を担ったことは記憶に新しい。

地域高規格道路である新潟山形南部連絡道路（新潟県村上市～山形県東置賜郡高畑町間延長約 80km）は、これらの問題を解消し、安全で円滑な交通を確保するとともに、村上地方生活圏と山形県米沢市を中心とする米沢地域集積圏との交流を促進し、地域の振興と活性化を図ることを目的として計画された自動車専用道路である。本道路を形成する一部区間として、鷹ノ巣道路（新潟県岩船郡関川村大字下山口～同村大字片貝までの延長 5.0km）は事業化された。

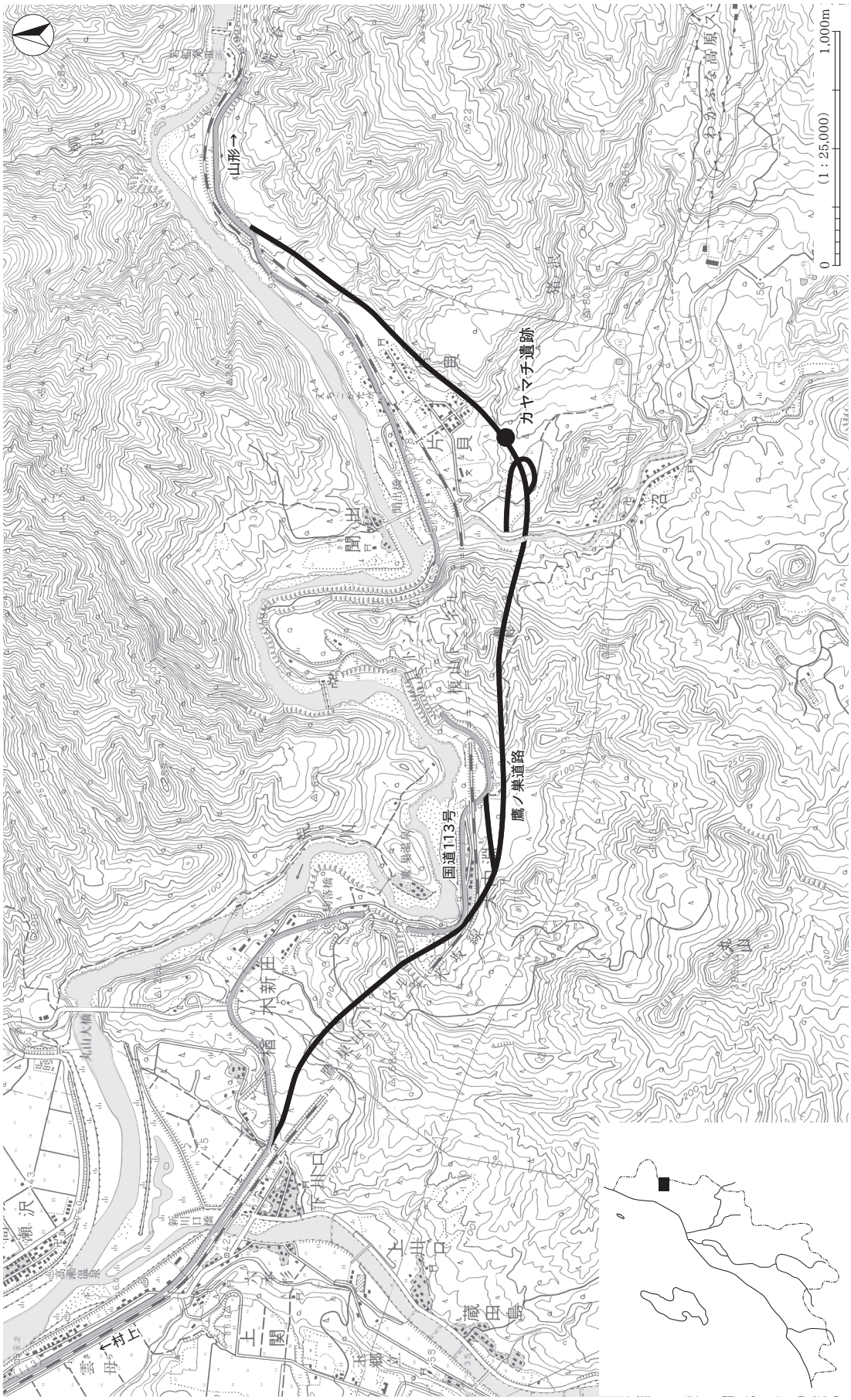
鷹ノ巣道路は、1996（平成 8）年 8 月に地域高規格道路整備区間に指定され、1997（平成 9）年度に事業化された。1998（平成 10）年にルートが承認され、1998・1999（平成 10・11）年度に環境影響評価を行い、用地取得及び工事に着手した。国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）にルート内の埋蔵文化財の有無の問い合わせがあった。県教委は、ルート内に周知の遺跡はないが周辺に遺跡が所在するため、分布調査が必要であると回答した。県教委から委託された財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）は、2000（平成 12）年 11 月 29 日に分布調査を行ったが、その後、2001（平成 13）年度にルートを含め計画の見直しが開始され、2003（平成 15）年度には道路法線 SAT・No.145 以西の見直しルートが承認された。本遺跡範囲は 2004（平成 16）年に埋文事業団が試掘調査を行った。2007（平成 19）年 8 月に事業の執行が一旦見合わされたが、2009（平成 21）年度には解除された。2004 年の試掘調査で新たに遺跡登録した「カヤマチ遺跡」は 2012（平成 24）年度に本発掘調査を行うことになった。

2　調 査 の 経 過（第２図）

A　試　掘　調　査

調査対象面積 27,200m^2 に対し任意の試掘坑（以下、略称 T とする）を 43 か所設定し、重機（バック･ホー）及び人力による掘削･精査を行い、遺構･遺物の有無を確認した。その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。実質調査面積は 672m^2 で、試掘率は 2.5%である。

遺構は 24T で土坑 1 基、ピット 3 基を検出した。遺構確認面はⅤ層である。遺物は 24T のⅢ層から、縄文時代早期の土器 50 点、篦状石器 1 点を含む剥片・剥片石器 7 点が出土した。このほかに 5T で縄文土器 1 点、搬入礫 1 点が出土した。遺構・遺物を検出した 24T を中心に 1,020m^2 の本発掘調査が必要



〔国土地理院発行「安角」「小国」1：25,000原図〕

第１図　鷹ノ巣道路と遺跡の位置

第２図　試掘調査トレンチ位置図

であると判断し、県教委に報告した。遺跡名については、字名の「片貝」は既に「片貝遺跡」として登録していたため、遺跡地一帯の通称を用い「カヤマチ遺跡」として新たに登録した。

B 本発掘調査

調査の事前準備として、調査区内の草木刈り払い及び杉・雑木約 130 本を伐採した。伐採には後始末を含め 6 月 18 日～ 7 月 6 日まで要した。本発掘調査は、試掘調査で遺物が出土しただけでなく、黒褐色土の落ち込みなども検出した 24T 付近を中心に作業を開始し、遺物・遺構の検出状況を見ながら周囲に広げることとした。表土除去は 7 月 9･10 日に行い、その後、調査で生じる排土の運搬に用いるベルト･コンベアの設置を行った。

本発掘調査で出土した遺物は石器のみで、24T 付近である程度まとまって出土した。この周囲からも散発的に出土したが、Ⅰ層からの出土も一定量あった。遺物の出土状況に鑑み、3・4B ～ D グリッドについては全面的に調査、その周囲はトレンチ調査とすることとした。調査区は全体に傾斜が急で、24T 付近にはわずかな平坦部分もあるが谷筋もあり、降雨後は湧水も見られた。このような状況から降雨により作業を休止せざるを得ない日もあったが、基本的に調査は順調に進み、8 月 23 日には県教委から終了確認を得た。9 月 1 日には現地説明会を行い､地元住民を中心に小･中学生も含め 29 名の参加者があった。9 月 5 日にはローリング･タワーを用いて完掘写真を撮影した。その後、基本層序の写真撮影･実測作業･旧地形の測量などを行い、土層観察用に最後まで残していたベルトを除去して 9 月 10 日に調査を終了した。事務所・機材の撤収終了後の 9 月 18 日には、国交省に現地を引き渡した。

3 調 査 体 制

調査の体制は以下のとおりである。

A 試 掘 調 査

調査期間	2004（平成 16）年 5 月 31 日～ 6 月 7 日・11 月 22 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越 麟一）
調査機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	黒井　幸一　（事務局長） 長谷川二三夫（総務課長） 藤巻　正信　（調査課長）
庶務	高野　正司（総務課班長）
調査指導	山本　　肇（調査課試掘・確認調査担当課長代理）
調査担当	滝沢　規朗（　　同　　班長）
調査職員	片岡　千恵（　　同　　嘱託員）

B　本発掘調査

調査期間	2012（平成24）年6月18日～9月18日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　高井　盛雄）
調査機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長） 熊倉　宏二（総務課長） 北村　　亮（調査課長）
庶務	伊藤　　忍（総務課班長）
調査指導	田海　義正（調査課本発掘調査担当課長代理）
調査担当	佐藤　友子（　　同　　専門調査員）
支援組織	藤村ヒューム管株式会社
現場代理人	金子　政彦（藤村ヒューム管株式会社 埋蔵文化財調査部 現場代理人）
調査員	継　　実（　　同　　調査員）

C　整理作業

出土遺物の洗浄は現地調査と並行して行い、整理作業は2012（平成24）年9月19日から藤村ヒューム管株式会社整理作業所にて、図面整理、写真整理、遺物の注記・接合・実測・トレース、遺物写真撮影、原稿執筆などを行った。1・2月には編集・校正作業を行い、3月には印刷・刊行した。

整理期間	2012（平成24）年9月19日～2013（平成25）年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長　高井　盛雄）
整理機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長） 熊倉　宏二（総務課長） 北村　　亮（調査課長）
庶務	伊藤　　忍（総務課班長）
整理指導	田海　義正（調査課本発掘調査担当課長代理）
整理担当	佐藤　友子（同　専門調査員）
支援組織	藤村ヒューム管株式会社
調査員	継　　実（藤村ヒューム管株式会社 埋蔵文化財調査部 調査員）
補助員	白井　雅明（　　同　　調査員） 白井かおり（　　同　　作業員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺 跡 の 位 置

本遺跡の所在する関川村は新潟県北東部に位置し、南部は胎内市、北・西部は村上市、東部は山形県小国町とそれぞれ接している。村域約 300km^2 のうち 8 割を山地や丘陵が占める、いわゆる山村である［平田 1992］。村の中央を南北に分断するかたちで荒川が流れており、1954（昭和 29）年までは荒川北岸が女川村、南岸が関谷村であった。集落は荒川とその支流に沿って点在し、関川盆地東縁の下関が現在、関川村の中心となっている。下関は町形成が早く、近世には既に関郷の中心村として交易を中心に栄えており、豪農である渡辺家が居を構え、大庄屋として地域の産業・文化の発展に寄与した。

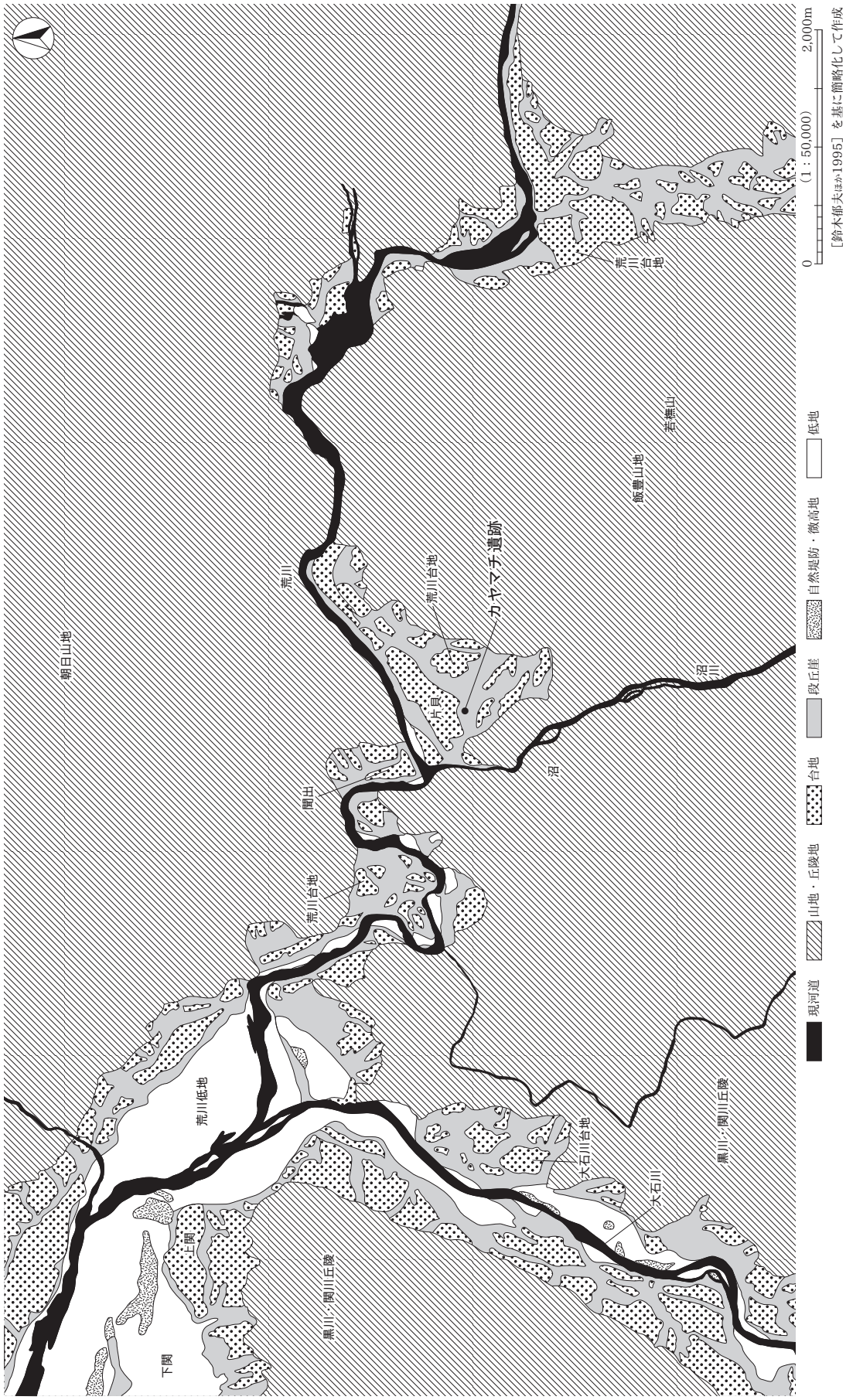
関川村と周辺地域とは、村の中心を横断する JR 米坂線と米沢街道（国道 113 号線）によって結ばれている。主要な道路はこのほかに国道 290 号線があり、関川盆地を縦断する形で村上市と新発田市を結んでいる。現在、荒川に沿って走る米沢街道は、かつては米沢方面に向かって平野を過ぎたところで荒川南岸の山間部に入り、榎峠・大里峠という二つの峠を越えて小国へと至る道筋であった。

2　地 理 的 環 境

山形県との県境付近に源を発する荒川は、急峻な山岳地形を開削しながら西進し日本海に注ぐ。上流域は北岸が朝日連峰に連なる前衛の山岳地帯、南岸は飯豊山系に属する急峻な山地と丘陵で占められており、流域に形成される沖積低地は狭小である。一方、下流には朴坂山地から連なる峰と蔵王山塊の末端尾根に南北を挟まれて狭門が形成され、ここを抜けた荒川は一気に越後平野の最北部に流れ出て扇状地を形成する。こうして東西を山地で阻まれた中流域には、盆地（関川盆地）が形成される。

関川盆地には荒川支流の女川・大石川・鍬江沢川などが流れ込み、荒川を含む各流域には小規模ながらも複数面の河成段丘（河岸段丘）が分布している［鈴木郁夫 1999］。段丘は標高 200 ～ 100m の高位段丘、100 ～ 70m の中位段丘、低位段丘の 3 つに大別でき、それぞれ著しい浸食によって段丘崖が発達する。旧石器時代の遺物散布地である荒川台遺跡を調査した阿部朝衛は、低位段丘に属する小見面シルト層採取木片の放射性炭素年代から、段丘面が旧石器時代以降のものである可能性を指摘している［阿部ほか 2002］。

地形分類図によれば、本遺跡は前述の小見面とその背後の高位段丘からなる地形に立地する。本遺跡のすぐ北側で荒川が急激な蛇行を始めることに加えて支流の沼川が合流することも重なり、付近一帯は段丘崖が発達する。浸食によって段丘は尾根状に分断されており、浸食谷へと至る斜面の傾斜は急である。本遺跡はこのような地形の一つ、幅 50m ほどの比較的平坦な鞍部をもつ西向きの斜面中位に位置する。標高は 88 ～ 100m、北側を流れる猪ノ沢との比高は 15 ～ 25m、斜度は 10 ～ 20°である。


朝日山地
荒川
荒川台地
カヤマチ遺跡
片貝
荒川台地
荒川台地
閘出
荒川低地
沼
沼川
飯豊山地
若鳥山
荒川台地
大石川台地
大石川
黒川・関川丘陵
上関
下関
黒川・関川丘陵
現河道
山地・丘陵地
台地
段丘崖
自然堤防・微高地
低地
0
(1：50,000)
2,000m
［鈴木郁夫ほか1995］を基に簡略化して作成

第３図　周辺の地形

3 歴 史 的 環 境

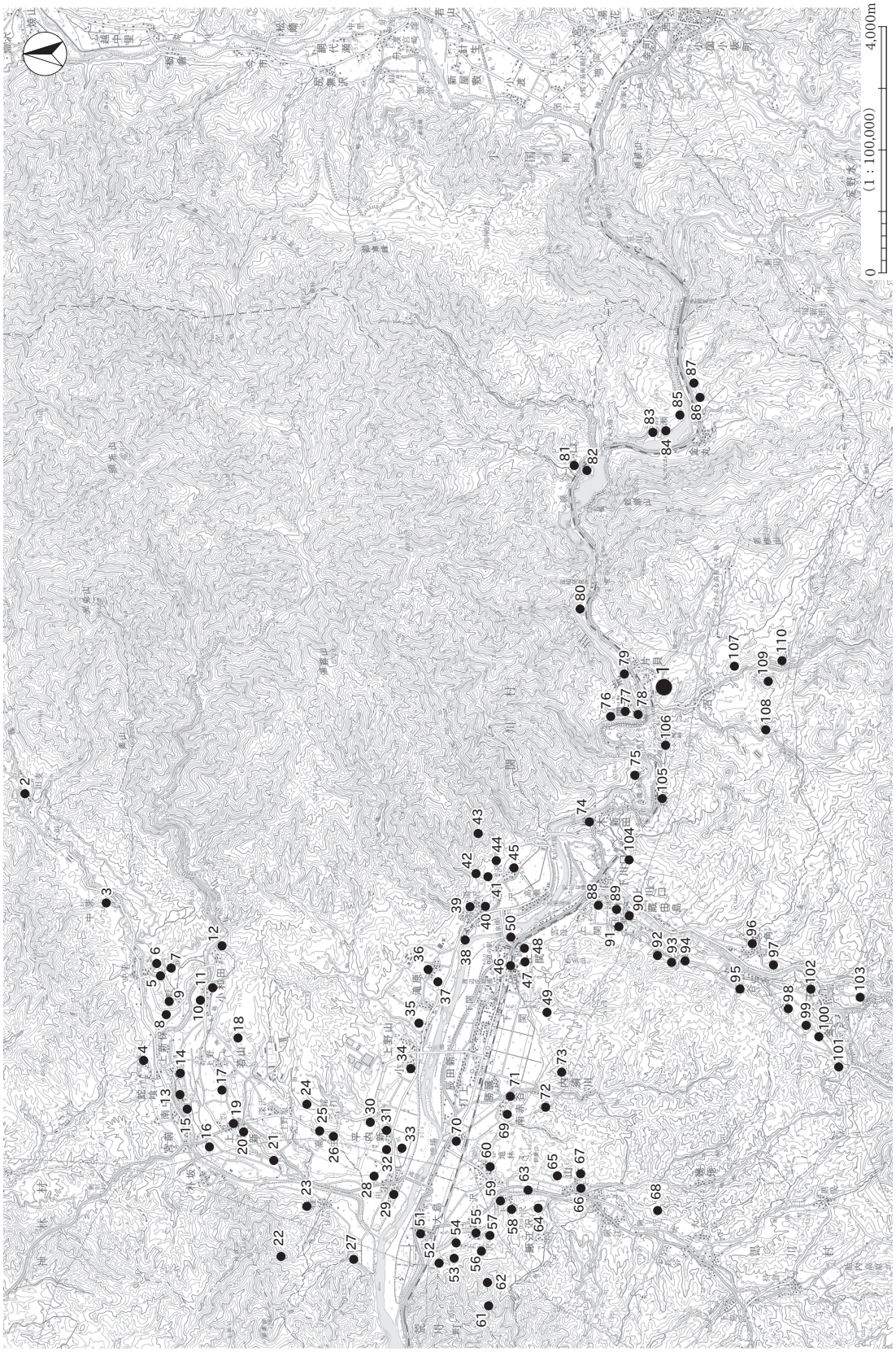
関川村では、現在までに118か所の遺跡が新潟県遺跡地図に登録されている。村域の大半を山地や丘陵が占める地勢を反映して、遺跡の半数以上（74遺跡）を縄文時代の遺跡が占める。同様の理由から、中世にはこの一帯を支配した城氏や荒川保地頭河村（垂水）氏、在地土豪の内須川・関・三潴氏などの居館や山城が多く構築されており、板碑や石塔・石仏などを含めると当該期のものは33遺跡にのぼる。旧石器時代の遺跡は7か所と意外に少ないが、これは山地が故に遺物発見の機会が少ないことが影響しているのであろう。一方、弥生時代から古代の遺跡はほとんど見あたらず、関川盆地で古代の遺跡がわずかに4か所知られるのみである。

このように、関川村域では100を越える遺跡が知られているが、本格的な調査例が少なく、実体の不明な遺跡が多い。その中で、本遺跡の北西1.5kmの低位段丘上に立地する旧石器時代の遺跡である荒川台遺跡では、1986（昭和61）年から帝京大学によって継続的に学術調査が行われており、石器を中心に後期旧石器文化に関わる多角的な調査・研究が続けられている［阿部2010］。

縄文時代の遺跡は上野新（20）・高田（28）・大石（102）の3遺跡が低地にあるほかは、すべて荒川とその支流に面する段丘上に立地する。土器型式から時期が判明しているものでは、中期に属する遺跡が圧倒的に多い。関川村史によれば、若山（17）・小見（34）・ハツ口（82）遺跡などで当該期の竪穴住居が検出されている［高橋1992］。前・後・晩期の遺跡も少数確認されているが、草創期の遺跡は今のところ未発見で、早期の遺跡は本遺跡のほかに家ノ上遺跡（5）しか知られていない。家ノ上遺跡は女川とその支流の藤沢川に挟まれた標高110mの段丘上に立地する遺跡で、箆状石器3点と剥片多数が採集されている。このほか荒川流域としてみると、本遺跡の上流約20kmの山形県小国町で早期中葉～前期前葉の集落（古屋敷遺跡）が調査されている［佐藤ほか1995］。古屋敷遺跡は本遺跡と同じ荒川左岸、標高209mの河岸段丘上に立地する遺跡で、竪穴住居6軒以上、土壙・性格不明の穴80基以上と石器を主体とする多数の遺物が発見されており、石器について調査者は「石箆の多さ」を特徴の一つにあげている。新潟県内に目を広げると、これまでに160地点を越える早期の遺跡が発見されているが、その多くが中越地方の信濃川・魚野川、上越地方の関川などの上流域に分布し、特に信濃川上流域の河岸段丘上に集中する傾向を示している［小熊1999］。一方、下越地方の遺跡分布は今までのところ希薄である。

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
旧石器時代		19	上野	55	堂の下	84	前瀬	古 代		44	垂水根小屋城跡
24	上山	20	上野新	56	水頭沢	85	前瀬A	4	山ノ上	47	安養寺石塔群
69	前林	23	桂	59	上土沢	86	金丸	36	松平	49	下関城跡
74	荒川台	24	上山	60	谷地林	87	田ミナクチ	46	下関	50	上関城跡
85	前瀬A	25	長根	62	下土沢	88	玉郷立	56	水頭沢	51	知足庵石仏
98	鮎谷南	26	上ノ原	64	鍬江沢	90	玉郷立東	中 世		57	雲泉寺石仏
縄文時代		28	高田	65	山本	91	玉郷立南	3	中東板碑	58	土沢館跡
1	カヤマチ	30	五百山	67	小松原	92	裏山	4	山ノ上	61	土沢城跡
2	田麦	32	江添	69	前林	93	裏山北	9	蕨野城跡	63	土沢傍示
4	山ノ上	34	小見	70	橋場	94	裏山南	11	波走石塔	66	観音堂板碑群
5	家ノ上	35	上野山	71	南赤谷	95	鮎谷	12	小和田	68	鍬江城跡
6	上ノ山	37	滝原	75	湯沢山キャンプ場	97	安角	15	南中傍示	72	南赤谷城跡
7	家ノ上南	40	湯沢	76	家前	99	上谷	21	金沢	73	内須川城跡
8	蕨野	41	ヤッコハカ	77	古屋敷	100	沼田	22	桂城址	89	六本杉板碑
10	波走	42	湯沢山	78	屋敷添	101	金俣	27	桂の五輪塔群	96	龍門寺五輪塔
13	南中	45	堂ノ前	79	片貝	102	大石	29	高田石仏	107	沼板碑
14	蛇喰	48	上関	80	平左エ門沢	103	上ノ平	31	上野板碑	近 世	
16	宮ノ前	52	成沢	81	沢入	105	大内渕	33	平内新五輪塔群	67	小松原
17	若山	53	下山田	82	ハツ口	108	名倉	38	垂水館跡	104	米沢街道鷹ノ巣峠
18	上林	54	堂ヶ下	83	前瀬北	110	大里沢	39	松岳寺石造物群	106	米沢街道榎峠
								43	垂水城跡	109	沼金山

第1表　関川村遺跡一覧



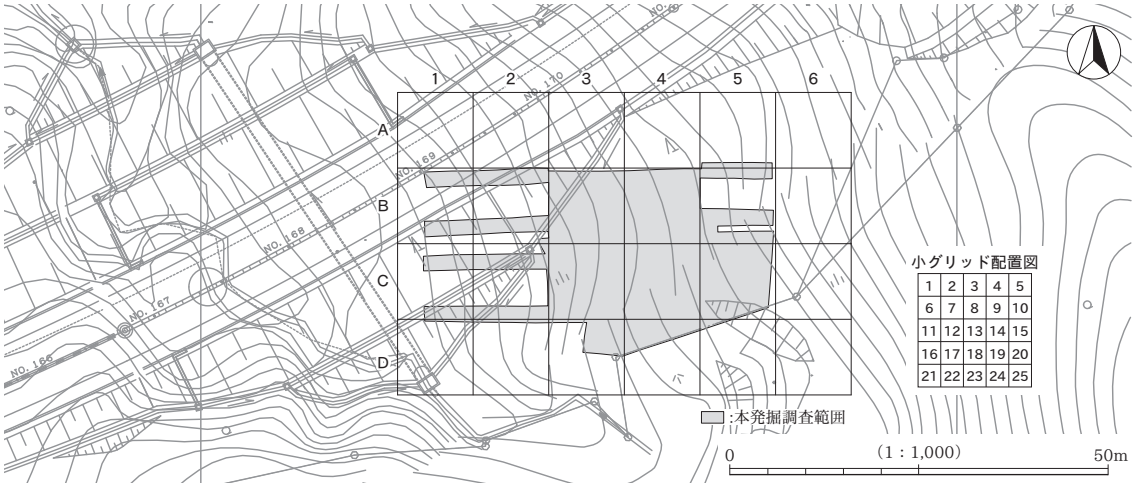
〔国土地理院発行『小国』1：50,000原図〕

第４図　カヤマチ遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドの設定（第５図）

グリッドの設定については、道路工事で使用している鷹ノ巣道路計画法線センター杭 No.170（X=229878.493・Y=98346.014　座標は世界測地系）をグリッド起点（3A）とし、これと真北を結んだラインの延長を南北方向の基線とした。グリッドは 10m 方眼を一単位（大グリッド）とするが、遺構・遺物位置の把握や遺物取り上げの便宜上、その中をさらに 2m 方眼で 25 分割し小グリッドを設定した。グリッド名称は東西方向には算用数字、南北方向にはアルファベットを用い、両者の組み合わせで「1A」というように表した。また、小グリッドの名称は算用数字で表した。調査区中央にある 4C グリッド起点の座標値は、X=229858.493・Y=98356.014（世界測地系）である。



第５図　グリッド設定図

2　調　査　方　法

調査に際し、遺物包含層の掘削は竹箆･両刃鎌･移植ゴテなど小型の道具を用いて人力で行った。表土（Ⅰ層）は当初、重機（バック・ホー）で除去する予定でいたが、堆積が薄く下層の褐色土がすぐに露呈してしまう部分が多かった上、Ⅰ層中からも遺物が出土し始めたため、表面の腐葉土以外は人力で掘り下げた。遺物の希薄なか所については、必要に応じてジョレン・三角ホー・スコップなども併用して効率よく作業を進めるように努めた。

出土遺物については、トータルステーションによりすべて出土位置を計測した。出土遺物を即時計測することができない場合は、出土位置・土層・種別・日付などを記入したラベルを出土地点に残し、遺物本体は速やかに取り上げた。

第Ⅰ章で述べたとおり、遺物の希薄な１・２・５グリッドは、全面調査を行わずトレンチ調査とすることとなった。トレンチは 2m 幅のものを調査区の南北両端と中央部に合計６か所設定し（図版 1）、全面調査部分と同じ方法でⅤ層上まで掘り下げた。各トレンチの名称は、調査年度（平成）の「24」と個別番

号・トレンチの略称「T」の組み合わせで「24-1T」などと表し、個別番号は設定した順に付与した。

基本層序については、24T 東壁を南北方向に延長して土層観察を行い決定した。また、地点ごとで土層認識に違いが出ないよう、調査区中央に幅 80cm の観察用ベルトを設定し調査終了まで活用した。堆積土層はこのベルト及び各トレンチ、調査区北壁の一部で写真と図面に記録した。

3　基　本　層　序（図版 1・2・3・10 ～ 12）

遺跡の堆積土は、縄文時代の基盤層を含め、以下の 5 層に分層した。

Ⅰ層：黒色（2.5Y2/1）土　土層の上半は腐葉土が主体的で草木根も多い。遺物包含層である。粘性・しまり共にない。

Ⅱ層：褐色（7.5YR4/4）土　遺物包含層である。粘性はなく、しまりは有る。

Ⅲ層：黒褐色（7.5YR3/2）土　遺物包含層である。炭化物が少量混入する。粘性はなく、しまりは有る。

Ⅳ層：褐色（10YR4/4）土　遺物包含層である。5 ～ 15cm 大の風化礫を多く含む。粘性やや有り、しまりは強い。

Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR5/4）土　縄文時代の基盤層である。場所により土色の濃淡が見られる。凝灰岩・砂岩・泥岩などを多量に含む。粘性やや有り、しまりは強い。

各土層とも地形に対して基本的には平行堆積するが、4C2 付近では風倒木の痕跡なのか、土層の逆転や局所的に堆積が厚くなる部分がある。Ⅰ・Ⅳ層は調査区全域で堆積が確認できるが、Ⅱ・Ⅲ層の堆積は局所的である。調査区の大半でⅣ層直上にⅠ層が堆積することが目を引くが、魚野川に面した斜面に立地する岩原Ⅰ遺跡［岡本 1990］では、ローム漸移層（本遺跡Ⅳ層に相当）の台地先端部での厚い堆積や漸移層の直上に表土が堆積するという、本遺跡と近似する地形・土層堆積状況を呈する例もみられる。試掘調査で遺物が出土したⅢ層は、24T が設定された比較的平坦な部分でしか確認されなかった。この土層はいわゆるレンズ状堆積である。Ⅴ層上面もおおよそ浅い窪地状となっており、Ⅲ層はこうした地形に落ち葉などが溜まることで限定的に生成された土層の可能性も考えられる。また、Ⅱ層も基本的に同様の堆積状況であるが、こちらは 24-3T 東端にも堆積が確認できる。

調査区全域で確認できるⅣ層はⅤ層が赤褐色に濁ったような土色で、Ⅴ層の漸移層と見られる。急傾斜部分では 10cm 前後と薄い堆積だが、緩傾斜部分では 40 ～ 60cm と一変して堆積は厚くなる。また、調査区北半部分では、岩盤層由来のものと考えられる砂岩・泥岩を主体とするブロック状の風化礫を多く含む。調査では本層からも遺物が出土したため、人力ですべて除去した。

4　遺　　構

24T 周辺は、試掘成果や地形から見て調査区の中で最も成果が期待できる部分として慎重に調査にあたった。しかし、結果的に新たに遺構は確認できず、試掘時に検出したピットや土坑も自然に形成されたものと判明した。ただし、土器片すべてと箆状石器の大半は本地点から出土しているという事実は、浅い窪地状となる本地点で何らかの活動が行われた可能性を示唆するものといえよう。このほかの部分では、前述した風倒木のような痕跡に伴う黒褐色土の広がりが確認されたところはあるものの、遺構の可能性を窺わせるような落ち込みは存在しない。

第Ⅳ章　遺　　物

遺物は、試掘調査で縄文時代早期の土器片と石器類が、本発掘調査では石器類が出土した。出土遺物の総点数は約 150 点で、そのほとんどを石器類が占める。出土層位は基盤層を除くすべての土層から出土している。

1　土　　器（図版 4・13）

試掘調査で 24T から約 50 点出土したが、図化したもの以外は細片である。二次的な比熱や風化が著しく器面の遺存状態は全般によくない。胎土は共通して砂粒や礫を多く含むやや粗雑なものであり、繊維をわずかに含む。時期的には、土器の施文の特徴からは縄文時代前期中葉の可能性もあるが、胎土の特徴や共伴する石器の組成を勘案すると縄文時代早期後葉に比定される。

1 は底部片である。比較的鋭利な尖底で、胴部から口縁部もあまり広がらない器形になると想定される。内外面とも無文のようである。器面は内外面とも比熱によって硬化し、細かく割れている。2 ～ 5 は胴部片である。2 は半裁竹管状の浅い沈線が横位と斜位に確認できる。3 ～ 5 は同一個体である。3・4 は外面に直前段合撚の原体（観察表参照）を回転させて施文している。内面はナデのほかにも施文されている可能性もあるが、判然としない。5 は風化によるものか器面に胎土中の礫が露出して荒れており、施文の有無をよく観察出来なかった。

2　石　　器（図版 4 ～ 7・13 ～ 15）

A　概　　要

出土した石器は、全部で 101 点（重量 3928.4g）である。内訳は、箆状石器 8 点（7.9%）・不定形石器 53 点（52.5%）・剥片 36 点（35.6%）・石核 2 点（2.0%）・磨石類 2 点（2.0%）で、ほぼ不定形石器と剥片が占める。これらは調査区全域で出土したが、大半は 4CD グリッドに集中し、そこから東斜面の下方に向かってややまとまって分布する。なお、箆状石器は調査区外表採の 13 を除き、4C グリッド及びその直近で出土した。

本節の記述については、器種毎に概要を述べ、個々の法量等については主に遺物観察表に依ることとした。また、本発掘調査の主体が石器を中心とする遺物であることや、調査例の少ない縄文時代早期のものである点を考慮し、石器は分布図及び観察表に図版未掲載のものも含む全点を提示した。

石器の分類は不定形石器についてのみ行い、『清水上遺跡Ⅱ』［鈴木ほか 1996］に準拠した（第 2 表）。

B　石　　材（第 6 図）

石材は、珪質頁岩（96 点 : 95.0%）、凝灰岩（3 点 : 3.0%）、チャート（1 点 : 1.0%）、安山岩（1 点 : 1.0%）の 4 種を認めた。石材の同定については、肉眼及びルーペで観察し行った。石材の大半を占める珪質頁岩は山形県や下越地方に広く見られる石材で、七谷層の分布する阿賀野川・加治川・荒川・三面川やそれ

らの支流などで採集できる。本遺跡で出土したものには、色調・粒子の密度・剥離の入りやすさ・風化の度合いなどの点でバリエーションがあり、それらを基に以下の５つに分類した。

珪質頁岩Ａ類：色調は黒～黒褐色である。細かい粒子で密度が高く、硬質な傾向がある。剥離が入りやすく、風化しにくい。

珪質頁岩Ｂ類：色調は灰褐色である。細かい粒子で密度が高い。剥離が入りやすく、風化しにくい。

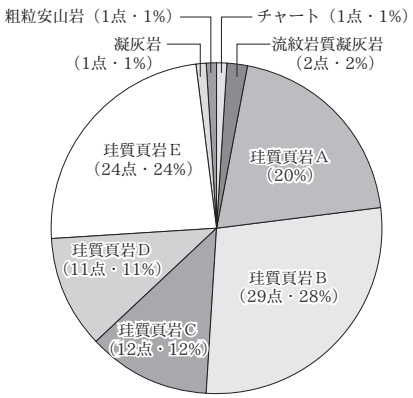
珪質頁岩Ｃ類：色調は灰色である。やや粗い粒子で密度は高い。剥離が入りやすく、風化しにくい。

珪質頁岩Ｄ類：色調は灰白色である。細かい粒子で密度が高い。剥離が入りやすく、風化しにくい。

珪質頁岩Ｅ類：色調は灰白～灰黄色である。やや粗い粒子で密度は高く、軟質な傾向がある。剥離が入りにくく、風化しやすい。

珪質頁岩については更に、質感の相違で各類２～３種類ずつのバリエーションを認めた。このようなバリエーションの豊富さからみて、石器の点数に比較して母岩の数が多いことが考えられる。ただし、接合関係については、同質母岩と認定できた中でも極めて乏しい。

このほか、３点出土した凝灰岩は、灰白色でやや粗粒・低密度な「凝灰岩」１点（40）と、灰黄色で細粒･低密度な「流紋岩質凝灰岩」２点に分けた。



第６図　石材別出土比率

Ｃ　各　　説

1）箆　状　石　器（図版４・５・13）

剥片を素材として、両面調整を行い刃部・基部を作出した石器である。８点出土し、うち２点は折損している。いずれも刃部を形成しているため、製品と考えられる。6・11・13 は、刃部にかけて幅広になる撥形で、そのほかは基部幅と刃部幅がほぼ同じ短冊形である。大きさで、大きく２種類に分けた。大型のものは最大長 10 ～ 14cm の中に収まり、小型のものは 6cm 前後の中に収まる。最大幅は、最大長に関わらず４～ 6cm 前後の中に収まる。断面形状は、全ておおよそ横長の菱形である。

加工はすべて両面調整で、おおよそ大中小の三段階で成形している。その調整剥離角はいずれも鋭く、剥離面は器体内部に及んでいる。調整剥離は、いずれも前段階の剥離面を打面として行っている。側縁部の稜は、大型・小型のいずれでも直線的で、敲打などは伴わない。これらの特徴は、器体の大小に関わらず全て共通している。ただし 11 のみ右側縁がやや波状、左側縁は折損面を打面としている点で異なる。刃部は、素材面や大きな剥離面を活かし、おおむね片面調整で片刃状に仕上げており、比較的直線的なものが多い。このほか、8 はやや弧状、10 は両面調整を交互に行うことで、波状にしている。いずれの刃部にも使用痕と考えられる細かい剥離を認めたが、6 は特に多い。ただし、磨滅した使用痕はいずれも認めていない。また、基部付近にも磨滅の痕跡はない。

素材については、調整剥離が内部に及び、素材面を除去しているため不明なものが多い。それ以外で素材の判断できるものから、３種類の素材がある。6・7 のように大型のものでは、比較的大きな縦長素材を用い、剥片末端部側が刃部、打点方向が基部になる傾向がある。11・13 のように小型のものでは、方形や横長の素材を用いている。また小型のものは、いずれも刃部となる素材端部を未調整のまま成形している。10・11 は、折損後の細かい剥離があり、刃部の再生を試みている可能性がある。

2）不 定 形 石 器（図版５～７・14・15）

剥片を素材として、調整剥離により刃部を作出した石器、または使用痕のある石器である。使用による刃こぼれ状の剥離や、わずかでも使用痕があるものは、すべてここに含めた。それ以外は「剥片」とした。大きさは、最大長･最大幅からおよそ大中小の３種類がある。大きさに対する刃部形状の傾向などはない。使用痕については、図上で矢印範囲の表記をしたものだが、そのほとんどは微細な剥離痕である。微細な剥離痕以外の使用痕については、31 で微細剥離に伴って確認できる光沢痕の一例のみである。

分類別では、A1 類が３点（5.7%）、A2 類が１点（1.9%）、B1 類が１点（1.9%）、B2 類が１点（1.9%）、E2 類が２点（3.8%）、F1 類が 10 点（18.8%）、F3 類が２点（3.8%）、G 類が８点（15.1%）、H 類が１点（1.9%）、I 類が８点（15.1%）、J 類が 12 点（22.5%）、K 類が２点（3.8%）、複合しているものが２点（3.8%）である。概観すると、方形～縦長の剥片を素材として、形状をそれほど変形させない刃部形成が比較的多い。刃部の位置は、素材剥片の最も長い縁辺に多い。刃部のラインは、調整の片面・両面、調整剥離角度の急・緩に関わらず比較的直線的である。

刃部の形状は、各分類の通りである。その中で特徴的なものに着目すると、細かい差異がある。調整は、素材の片側側縁部や末端部に多くあるが、17 のように打点付近に見られる例もある。ほとんどは片面からの調整だが、22・32 のように両面調整のものもある。更に 15 や 21 は、左側縁を両面調整で抉入状に調整している。また、調整の段階はおおむね一段階で、剥離の単位は小さい。しかし、22 は大中小のおよそ三段階の調整を行っている。その大中の調整剥離角度はいずれも鋭く、剥離面は器体内部に及んでいる。この調整の特徴は篦状石器に認められるものであり、折損した未製品を転用したと考えた。三段階目の小さな調整は、緩い角度で単位は小さく、刃部ラインは直線状である。このほか、一つの石器の中に異なる刃部形状を複数確認したものもある。特に 28 は、左側縁に緩斜度の刃部、右側縁に急斜度の刃部、さらに上半折損後の抉入の刃部と、３種の刃部形状を認めた。

素材については、全体的な傾向として方形～縦長剥片が多いが、横長剥片もある。礫面や転礫面は、全点の２割程度にある。礫面については残存する例が多く、刃部形成の際避けられる傾向が認められる。折損面は、全点の約３割程度にあるが、意図したものか、調整中のものか、使用中のものかはいずれも判然としない。作業面については、接合資料である 15 ＋ 33（縦長の剥離作業）、29 ＋ 38（横長の剥離作業）から推測される。これらに先行する剥離作業は、

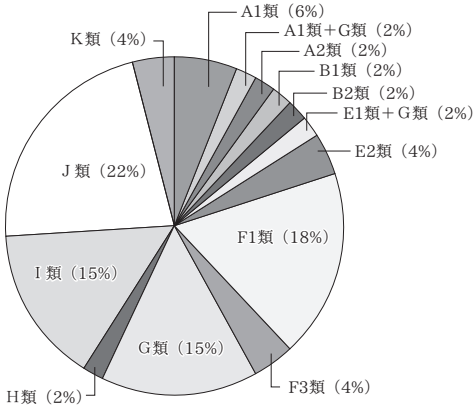
“	n @　@ ‘ @	n　C	f @ @	j `H　°	“
，	X N　C p [^ E } p x E A –　£	――	c • ¡ •	側縁と端部 片側縁と底縁	‘ P ‘ Q
a	X N　C p [‹ ^ E } p x E A –　£	外　彎　状	c • ¡ •	片側縁と端部 底　縁	a P **a Q**
b	^ È　^ E } p x E　£	…@　@	縦長・厚手 横長・厚手	片側縁 底　縁	b P
		@] @	縦長・厚手 横長・厚手	片側縁 底　縁	b Q
		O @] @	縦長・厚手 横長・厚手	片側縁 底　縁	b R
	X N　C p [ˇ　¸　¡ ‘	――	厚手	――	b S
c	s ¨ ° [^ E } p x　£	直　線　状	厚手	片側縁 （一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する。）	c P
		内　彎　状	厚手		
	^ E　p x　£	直　線　状	厚手	片側縁（Ｄ１類と同じ） 両側縁	c Q
		内　彎　状	厚手	片側縁（Ｄ１類と同じ） 両側縁	
	‹ ^　£	直　線　状 内　彎　状	œ Ł	― / i c P ˇ ¶ j 両側縁	c R
		直　線　状 内　彎　状	Ł	.. /	˛ @
d	P ， °i m b ， °j m b ， 大型・中型・急角度剥離	内　彎　状	横長・厚手 横長・厚手 縦長 横長	側縁 底縁 側縁 底縁	d P
	m b ， 大型・中型・浅角度剥離				
	‹ m b ， 中型・急角度剥離	内　彎　状	縦長 横長 縦長 横長	側縁 側縁・底縁 側縁 側縁・底縁	d Q
	小型剥離				
e	^ E ‹ ^ E } p x E s A –　£	――	c •	/	e P
		[　¡	c •	/　ˇ [	e Q
		――	¡ •	底縁 側縁 底縁と側縁	e R
f	^ E　^ E　p x　£	直　線　状	縦長 横長	側縁 底縁	f @
		外　彎　状	縦長 横長	側縁 底縁	
g	‡ `H i g p › l　£ E g p › j ‹ ^ E　p x　£	外　彎　状	w ˚ ˝ ' R ˚ ¡ •	底縁	g @
h	[　‹ ^ E A –　£	端部に丸味	縦長・薄手 横長・薄手	端部	h @
i	‡ `H i g p › l　£ E g p › j	――	縦長 横長	側縁 側縁・底縁	i @
K類	… ° `H i t　j （刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状）	外　彎　状	薄手		K　類

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

第２表　不定形石器分類表［鈴木ほか 1996］

石材 分類	凝灰岩	粗粒安山岩	チャート	流紋岩質凝灰岩	珪質頁岩A類	珪質頁岩B類	珪質頁岩C類	珪質頁岩D類	珪質頁岩E類	合　計
A1類					1			1	1	3
A1＋G類								1		1
A2類							1			1
B1類					1					1
B2類									1	1
E1類＋G類					1					1
E2類					1				1	2
F1類					4	3	1		2	10
F3類						1	1			2
G 類					5	2		1		8
H 類					1					1
I 類						4	1		3	8
J 類					2	6	2	1	1	12
K 類						1		1		2
合　計	0	0	0	0	16	17	6	5	9	53

第３表　不定形石器石材表



第７図　不定形石器分類別出土比率

打面を直交方向に転移し、それに先行する剥離作業は、更に打面を直交方向に転移している。このことから、素材剥片の剥離作業においては、打面転移を頻繁に繰り返していたことが推測される。この作業面の特徴は、ほとんどの素材剥片に見られるが、A1 類にのみ縦長で打面転移のないものが多い。素材厚は、比較的平坦なものや、打点部から末端にかけてすぼまるものが多い。17 や 21 のように、素材中心部から末端部にかけて厚くなる「し」字状の剥片もある。22 は、篦状石器未製品から転用したものであり、その素材は表裏の礫面形状から、拳大程度の剥片あるいは小形扁平円礫を推定した。

19 や 34 は、素材や刃部形状でさらに特徴的である。19 は、素材剥片剥離以前の頭部調整を認めた。打面は、ネガティヴな打瘤があることから、打面形成直後に剥片剥離したことが考えられる。打撃角は 74°である。調整剥離角 55°前後で均一な単位の調整により、比較的鋭角な刃部を形成している。34 は、比較的小型の剥片を素材とし、打点部をすべて除去するように調整し、19 と同様に比較的鋭角な刃部を形成している。打点部を除去している例は、本遺跡では篦状石器のみである。

3）剥　　片（図版 7・15）

石器の素材となる剥片である。形状では、縦長 21 点（58.4%）、方形 21 点（33.3%）、横長 8 点（8.3%）となり、縦長剥片が最も多い。打面形状は、平坦や凹状のものが多い。打撃角は、36 のような大きな違いを除けば、80°前後に集中する。複雑な打面部の調整はないが、38 のように頭部調整状になっているものもある。作業面は、36 のように複雑なものと、35 のように主要剥離面方向と比較的平行するものがある。素材厚は、打点部から末端にかけてすぼまるものと平均的なものがある。また、礫面や転礫面、節理は 3 割程度のものにある。これらの特徴は、不定形石器の素材剥片も同様であり、両者の関係が示唆される。不定形石器の素材としては、36 が 21・24 等に、35 が 16 等に選択されると考えられる。

4）石　　核（図版 7・15）

調整剥離とは考えられない剥片剥離を、最終剥離面に認めた石器である。出土した 2 点はいずれも小型で、剥片剥離作業の残核である。39 は、上下面が平坦に平行した板状の素材を用いる。上面を打面として、連続的な剥片剥離を行っている。打撃角は約 64°である。2 点の石核から確認できる最も大きな剥片は 3 ～ 4cm 程度である。しかし本遺跡の石器素材のうち、これほど小型のものはない。

5）磨　石　類（図版 7・15）

礫を素材として、使用痕と考えられる敲打や磨りなどを認めた石器である。40 は、いわゆる特殊磨石［八木 1976］と呼ばれるものである。断面三角形の楕円礫を素材とする。三角形の素材端部に磨面がある。同一面に敲打痕もあることから、「敲く・磨る」の複合作業をしていたと考えられる。41 は、扁平楕円礫を素材として、側面に敲打痕、表裏面に凹痕、裏面に磨面がある。大きな剥離面は、敲打作業の際に形成したものと考えられる。

第Ⅴ章　ま　と　め

1　遺 跡 の 性 格

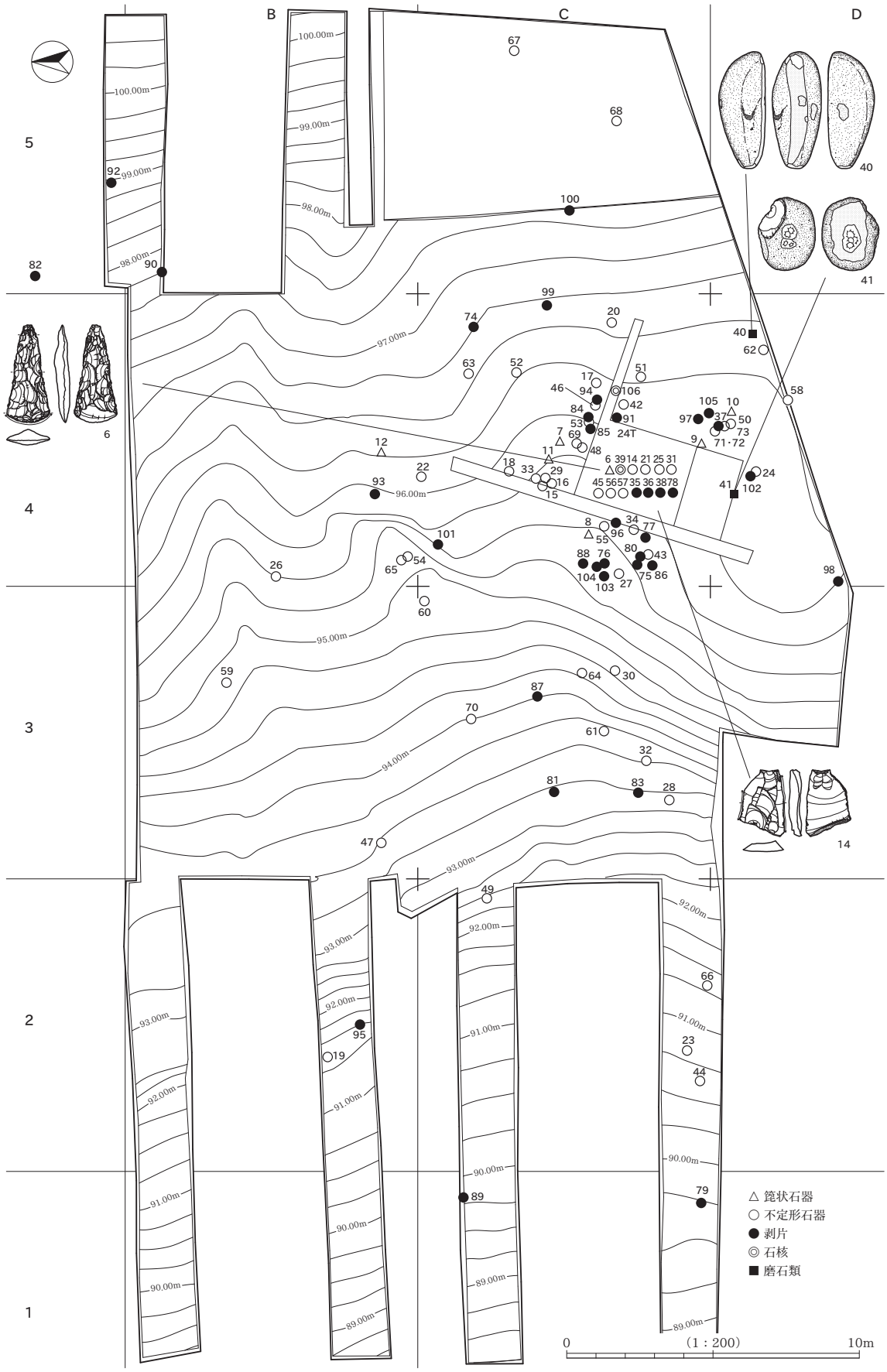
今回の調査では、土器・石器類が150点ほど出土した。土器の年代と出土層位から判断して、出土遺物はすべて縄文時代早期後葉と位置付けた。関川村域における縄文時代早期の遺跡は、本遺跡を含め2遺跡しか知られておらず、本発掘調査によって当該期の貴重な資料を提示できたものと考える。遺跡の性格としては、明確な遺構が見られないことや石器の内容から見て、一時的な野営地であったと考えられる。近隣の三面川流域における当該期の類似遺跡を見ると、上向い遺跡・黒渕遺跡［高橋・湯原ほか1997］、樽口遺跡［立木ほか1996］・弥三郎遺跡［湯原ほか1999］などがあり、点的な遺跡展開が原因で発見数は少ないものの、実際は河川に面した段丘上でこうした活動が広く行われていたことが窺える。

2　石器の種類と分布状況（第8・9図）

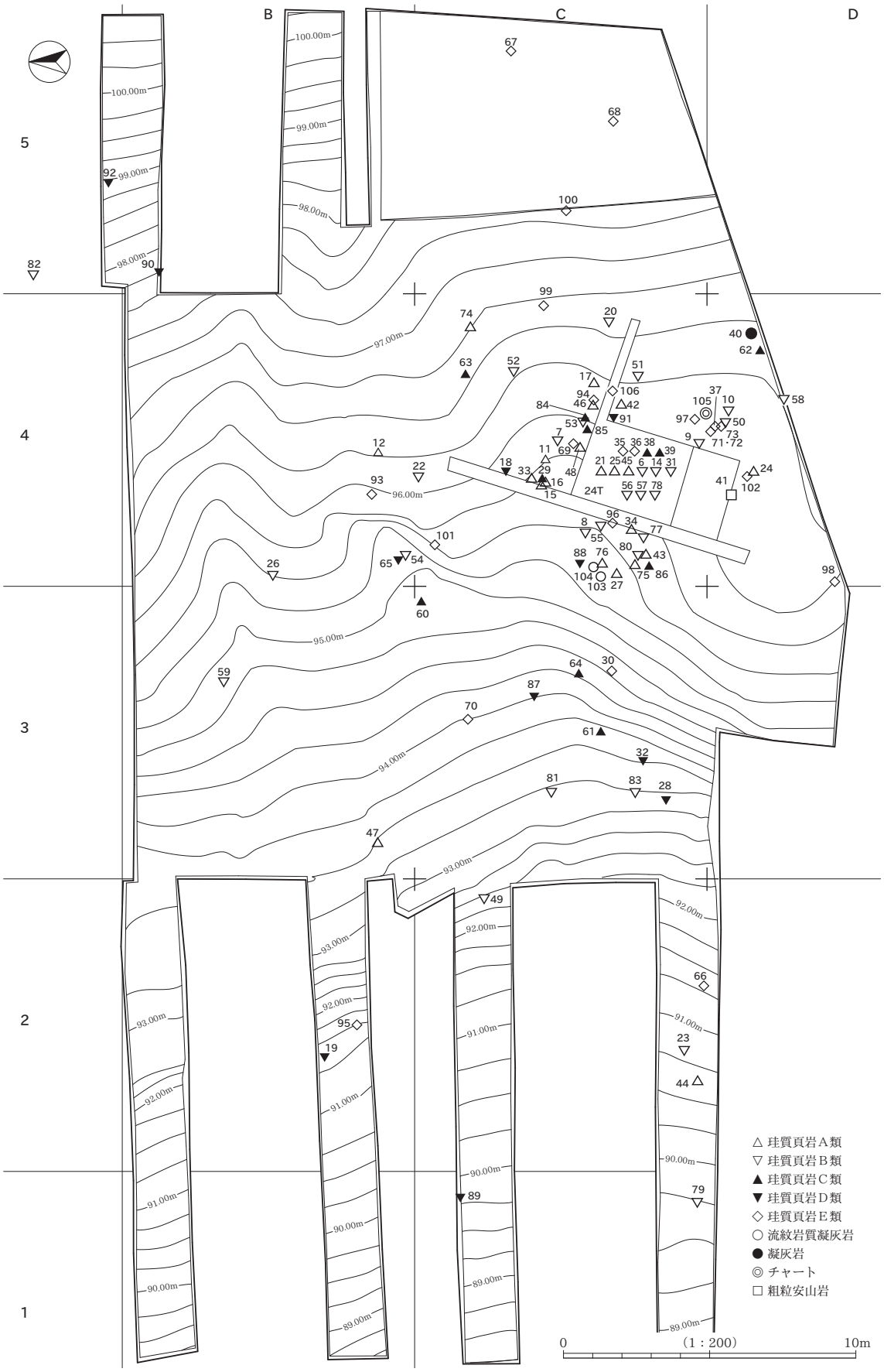
石器は箆状石器・磨石類・不定形石器・剥片・石核が出土した。縄文時代の石器組成［鈴木俊成1999］［桜井1984］からいえば狩猟具が欠落しており、調理具も圧倒的に少ない。出土量は不定形石器と剥片がほとんどであるが、わずか100点ほどの出土量に対して、箆状石器が8点という高い割合で出土しているのが特徴的である。土器も含め、出土遺物はほぼ平坦な地形である4CDグリッドに集中し、不定形石器と剥片は平坦部西側の斜面にややまとまりを持ちつつ調査区全域に分布する。両者の分布を珪質頁岩の石質別にみると、微視的ではあるがA～C類は平坦部にほぼ集中、D類は4BCグリッドと5ABグリッドに、E類は平坦部上方から斜面方向に帯状にといった分布傾向が看取できる。ただ、Ⅰ層から出土したものが複数ある状況をみると、自然災害による土砂崩れなどの後天的な要因で拡散したものも多いのであろう。いずれにせよ分布の中心は平坦部にあり、仮に石質のバリエーションを時間差と見た場合、この平坦部を普遍的に利用していたということになる。

3　不定形石器と剥片（第10・11図）

石器類の大半を占める不定形石器と剥片については、長幅比を計測して分布図（第10･11図）を作成した。出土した石器には、接合率の低さや礫面・転礫面や節理をもつものの少なさといった特徴が看取できるが、大きさについても不定形石器・剥片共、分布に偏りがあり、原石や極小の剥片は存在しない。すなわち、これらはあらかじめ石材採集地で荒割りして得た縦長剥片の中で一定の大きさの良品を抽出し、遺跡に持ち込んだものと解釈できる。具体的には、長さ2～9cm、幅1～6cm程度の大きさを持つ剥片を遺跡に持ち込み、このうち、幅2cm以下のものは道具として利用しなかった事が第10･11図から読み取れる。また、第11図を見ると、剥片と比べてかけ離れた大きさの箆状石器が4点（6～9）存在しており、これらについては直接、製品として持ち込んだ事が窺える。なお、長さ0.5cm、幅0.8cmという極小の剥片が1点存在するが、これは厚さも0.01cmと薄く、意図的に遺跡に持ち込んだものではなかろう。

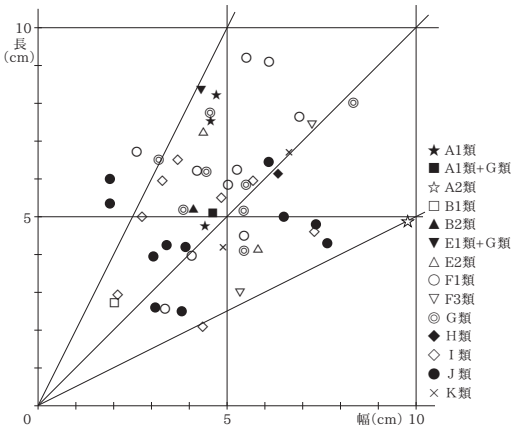


第８図　器種別出土分布図

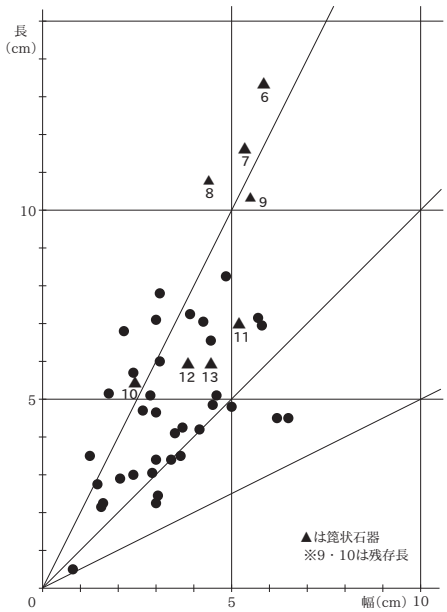


第９図　石材別出土分布図

刃部形状別分類では何らかの加工を加え刃部を作出したもの（F・G・I 類）が 52%と半数を占める。無加工で使用したもの（H・J 類）も一定量（24%）存在するが、スクレイパー（A・B 類）（14%）やノッチ類（E 類）（6%）は少なく、鋸歯状の刃部を持つもの（C 類）や刺突具的なもの（D 類）は出土していない。類別と大きさにそれほど密接な関係はないが、おおよそ 5 ～ 7cm のものを比較的よく用い、J 類はそれよりも小型のものもよく使っているようである。



第 10 図　不定形石器長幅分布図



第 11 図　篦状石器・剥片長幅分布図

要　　約

1　カヤマチ遺跡は新潟県岩船郡関川村大字片貝に所在する。遺跡は荒川左岸の浸食の進んだ河岸段丘に位置する。遺跡の標高は88～100m、荒川に向かって下降する斜度10～20°の斜面にある。

2　発掘調査は一般国道113号鷹ノ巣道路建設に伴い、2012（平成24）年6月18日～9月18日にかけて実施した。調査面積は715㎡である。

3　調査では地形の比較的平坦な部分を中心に、縄文時代早期後葉の土器・石器が約150点出土した。

4　出土遺物のうち101点が石器である。その内訳は箆状石器8点・不定形石器53点・剥片36点・石核2点・磨石類2点で、不定形石器と剥片が全体の9割弱を占める。

5　不定形石器の素材となる剥片は、あらかじめ石材採集地で荒割りして得た縦長で一定の大きさの良品を抽出し、遺跡に持ち込んでいる。

6　遺跡は狩猟・採集活動における一時的な野営地と考えられる。

引用・参考文献

阿部朝衛ほか 2002　「遺跡の立地」『荒川台遺跡　—1989年度調査—』帝京大学

阿部朝衛　2010　『新潟県荒川台遺跡第一二次発掘調査概報』帝京大学

岡本郁栄　1990　「第Ⅲ章　岩原Ⅰ遺跡　2.A　層序」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第56集　岩原Ⅰ遺跡　上林塚遺跡』新潟県教育委員会

小熊博史　1999　「第2節　縄文土器　第2項　早期　1　概要」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

桜井準也　1984　「石器組成の分析と考古学的地域について」『史学』54-1　三田史学会

佐藤主一ほか 1995　『山形県埋蔵文化財センター調査報告書　第21集　古屋敷遺跡調査報告書』（財）山形県埋蔵文化財センター

鈴木郁夫　1999　『土地分類基本調査　小国』新潟県

鈴木俊成ほか 1996　「不定形石器の分類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第72集　清水上遺跡Ⅱ（本文編）』新潟県教育委員会　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成　1999　「早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

高橋重右エ門　1992　「縄文時代」『関川村史』新潟県岩船郡関川村

高橋保雄・湯原勝美ほか　1997　『朝日村文化財報告書　第13集　上向い遺跡・黒渕遺跡』新潟県朝日村教育委員会　新潟県

立木宏明ほか 1996　『朝日村文化財報告書　第11集　樽口遺跡』新潟県朝日村教育委員会　新潟県

平田大六　1992　「位置と地勢」『関川村史』新潟県岩船郡関川村

八木光則　1976　「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』28-4　信濃史学会

湯原勝美ほか 1999　『朝日村文化財報告書　第17集　弥三郎遺跡』新潟県朝日村教育委員会　新潟県

土器観察表

No.	器　種	出土位置		色　調		胎土（混入物）	調　整・文　様		備　　考
		グリッド	層位	外　面	内　面		外　面	内面	
1	深鉢	試掘 24T	Ⅲ	赤褐色	黒褐色	繊維・砂粒・礫	ナデ	ナデ	内外面共被熱
2	深鉢	試掘 24T	Ⅲ	黒褐色	黒褐色	繊維・砂粒・礫	沈線（横位・斜位）	ナデ	外面スス付着
3	深鉢	試掘 24T	Ⅲ	灰褐色	灰褐色	繊維・砂粒・礫	直前段合撚　R{L{R{l, l}, R}, R{l, l}}	ナデ	外面スス付着
4	深鉢	試掘 24T	Ⅲ	黒褐色	灰褐色	繊維・砂粒・礫		ナデ	外面スス付着
5	深鉢	試掘 24T	Ⅲ	黒褐色	灰褐色	繊維・砂粒・礫		ナデ	外面スス付着

石器観察表（1）掲載分

No.	種　別	石　材	出土位置		分　類	法　量（単位：cm/ g）				取上 No.	備　　考
			グリッド	層位		長さ	幅	厚さ	重さ		
6	箆状石器	珪質頁岩 B 類①	試掘 24T	Ⅲ		13.35	5.85	2.15	105.9	－	
7	箆状石器	珪質頁岩 B 類①	4C13	Ⅲ		11.65	5.35	2.90	153.2	10	
8	箆状石器	珪質頁岩 B 類①	4C11	Ⅲ		10.80	4.40	2.00	82.3	59	
9	箆状石器	珪質頁岩 B 類①	4C23	Ⅲ		10.35	5.50	2.85	154.0	3	
10	箆状石器	珪質頁岩 B 類①	4D3	Ⅲ		9.70	5.45	2.45	131.7	38	
11	箆状石器	珪質頁岩 C 類	4C13	Ⅲ		7.05	5.20	1.00	38.3	11	
12	箆状石器	珪質頁岩 A 類①	4B23	Ⅳ		5.95	3.85	1.80	30.1	69	
13	箆状石器	珪質頁岩 E 類	3E12	表採		5.95	4.45	1.85	38.1	－	
14	不定形石器	珪質頁岩 B 類②	試掘 24T	Ⅲ	F1	9.10	6.10	1.70	72.0	－	
15	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	4C12	Ⅲ	E1+G	8.35	4.30	1.00	33.1	47	15・33 が接合。
16	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	4C12	Ⅲ	A1	8.20	4.70	1.55	49.6	50	
17	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	4C19	Ⅲ	G	8.00	8.35	3.00	168.7	63	
18	不定形石器	珪質頁岩 D 類	4C7	Ⅲ	G	7.75	4.55	1.45	45.5	33	
19	不定形石器	珪質頁岩 D 類	2B17	Ⅳ	A1	7.50	4.55	1.85	41.8	82	
20	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4C20	Ⅱ	F3	7.45	7.25	1.55	60.0	12	
21	不定形石器	珪質頁岩 A 類②	試掘 24T	Ⅲ	E2	7.25	4.35	1.90	33.5	－	
22	不定形石器	珪質頁岩 B 類②	4C2	Ⅱ	K	6.70	6.65	2.56	109.1	22	
23	不定形石器	珪質頁岩 B 類②	2C23	Ⅰ	J	6.70	6.65	1.65	48.2	75	
24	不定形石器	珪質頁岩 A 類②	4D2	Ⅱ	G	6.50	3.20	1.50	24.6	17	
25	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	試掘 24T	Ⅲ	F1	6.25	5.25	1.10	29.0	－	
26	不定形石器	珪質頁岩 B 類②	4B11	Ⅳ	F1	6.20	4.20	1.60	27.0	73	
27	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	4C16	Ⅱ	H	6.15	6.35	1.50	43.8	18	
28	不定形石器	珪質頁岩 D 類	3C22	Ⅳ	A1+G	5.10	4.60	1.55	37.1	71	
29	不定形石器	珪質頁岩 C 類	4C12	Ⅲ	A2	4.85	9.75	2.00	54.1	46	29・38 が接合。
30	不定形石器	珪質頁岩 E 類	3C19	Ⅰ	A1	4.75	4.40	2.05	36.4	23	
31	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	試掘 24T	Ⅲ	J	4.30	7.65	1.20	28.5	－	
32	不定形石器	珪質頁岩 D 類	3C18	Ⅰ	K	4.20	4.90	1.65	28.6	28	
33	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	4C12	Ⅱ	G	4.10	5.45	1.45	31.7	24	15・33 が接合。
34	不定形石器	珪質頁岩 A 類②	4C16	Ⅲ	B1	2.70	2.00	0.60	2.9	88	
35	剥片	珪質頁岩 E 類	試掘 24T	Ⅲ		7.80	3.10	1.20	21.9	－	
36	剥片	珪質頁岩 E 類	試掘 24T	Ⅲ		6.95	5.80	1.30	41.8	－	
37	剥片	珪質頁岩 E 類	4D3	Ⅲ		5.10	4.60	1.00	15.2	37	
38	剥片	珪質頁岩 C 類	試掘 24T	Ⅲ		4.50	6.20	0.90	13.8	－	29・38 が接合。
39	石核	珪質頁岩 C 類	試掘 24T	Ⅲ		2.55	5.35	3.20	32.0	－	
40	特殊磨石	凝灰岩	4D5	Ⅰ		15.90	6.75	6.40	810.0	5	
41	敲石	粗粒安山岩	4D2	Ⅱ		9.95	7.85	3.70	258.0	15	

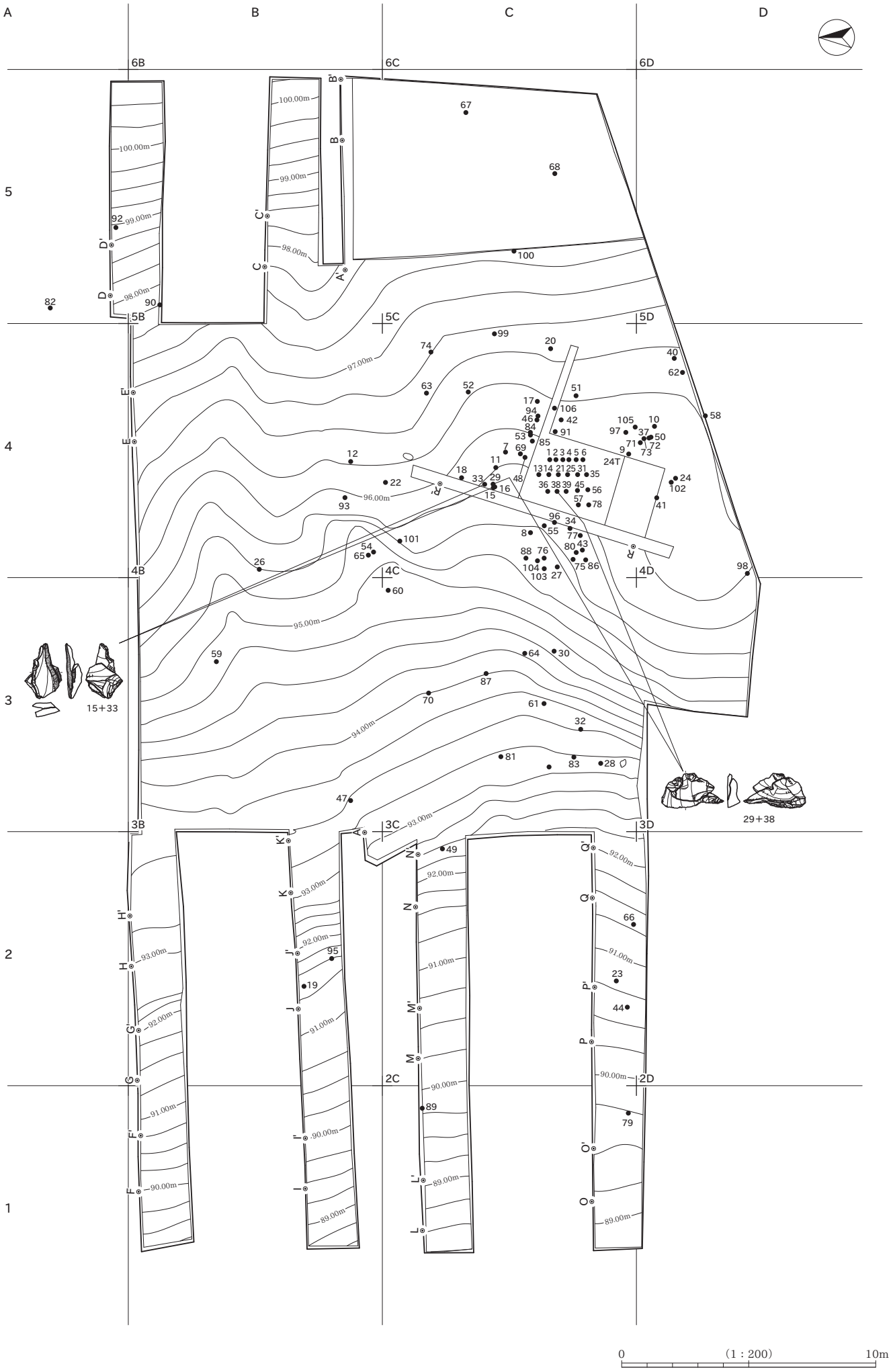
石器観察表（2）未掲載分

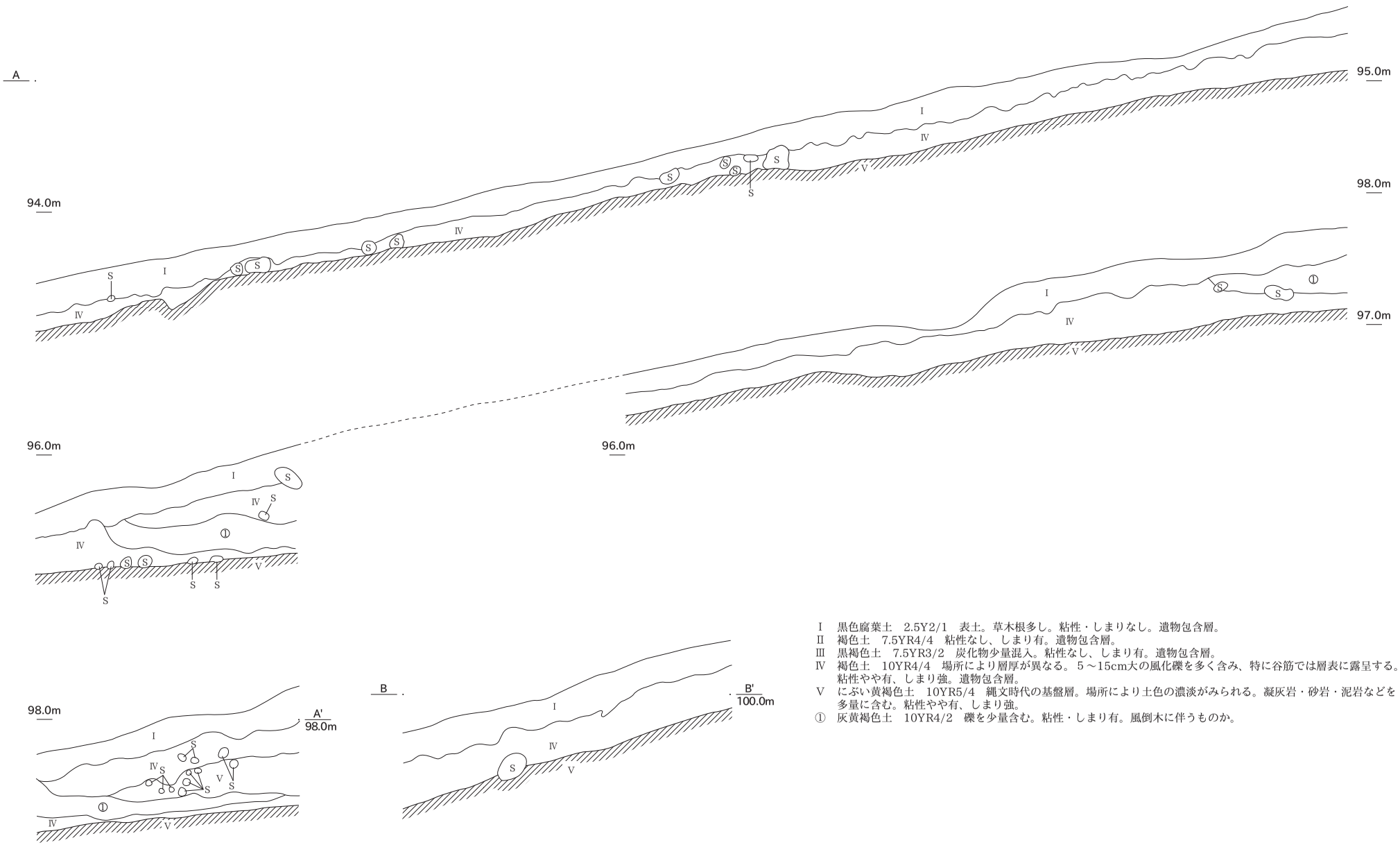
No.	種　別	石　材	出土位置		分　類	法　量（単位：cm/ g）				取上 No.	備　　考
			グリッド	層位		長さ	幅	厚さ	重さ		
42	不定形石器	珪質頁岩 A 類①	4C19	Ⅰ	J	2.50	3.80	0.73	3.9	13	
43	不定形石器	珪質頁岩 A 類②	4C16	Ⅱ	G	6.20	4.45	1.70	39.2	20	
44	不定形石器	珪質頁岩 A 類②	2C22	Ⅰ	G	5.85	5.50	1.45	42.4	76	
45	不定形石器	珪質頁岩 A 類③	試掘 24T	Ⅲ	F1	9.20	5.50	0.95	38.0	－	
46	不定形石器	珪質頁岩 A 類③	4C18	Ⅲ	F1	7.65	6.90	1.12	55.4	61	
47	不定形石器	珪質頁岩 A 類③	3B21	Ⅰ	F1	4.50	5.45	1.50	30.1	90	
48	不定形石器	珪質頁岩 A 類③	4C13	Ⅲ	J	4.80	7.35	0.80	20.3	51	
49	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	2C10	Ⅰ	G	5.20	3.85	1.30	17.6	78	
50	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4D3	Ⅲ	G	5.15	5.45	1.49	30.9	8	
51	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4C19	Ⅲ	I	6.50	3.70	1.10	19.6	62	
52	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4C9	Ⅲ	I	5.50	4.85	1.14	17.1	66	
53	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4C13	Ⅰ	I	5.00	2.75	0.85	8.5	49	
54	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4B21	Ⅰ	I	2.10	4.35	0.62	3.4	42	

石器観察表（3）未掲載分

No.	種　別	石　材	出土位置		分　類	法　量（単位：cm/ g）				取上No.	備　　考
			グリッド	層位		長さ	幅	厚さ	重さ		
55	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	4C17	Ⅲ	J	4.25	3.40	1.12	14.3	86	
56	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	試掘 24T	Ⅲ	J	4.20	3.90	0.75	6.8	－	
57	不定形石器	珪質頁岩 B 類①	試掘 24T	Ⅲ	J	2.60	3.10	0.55	4.6	－	
58	不定形石器	珪質頁岩 B 類②	4D9	Ⅰ	F1	2.55	3.35	0.79	5.0	40	
59	不定形石器	珪質頁岩 B 類②	3B9	Ⅳ	J	5.00	6.50	0.90	21.0	70	
60	不定形石器	珪質頁岩 C 類	3C5	Ⅱ	F1	6.70	2.60	0.84	7.6	35	
61	不定形石器	珪質頁岩 C 類	3C18	Ⅲ	F3	3.00	5.35	0.98	9.7	67	
62	不定形石器	珪質頁岩 C 類	4D5	Ⅱ	Ⅰ	4.60	7.30	0.98	23.5	45	
63	不定形石器	珪質頁岩 C 類	4C4	Ⅱ	J	6.45	6.10	1.70	59.2	30	
64	不定形石器	珪質頁岩 C 類	3C14	Ⅰ	J	5.35	1.90	0.74	5.2	25	
65	不定形石器	珪質頁岩 D 類	4B21	Ⅰ	J	6.00	1.90	0.98	8.8	44	
66	不定形石器	珪質頁岩 E 類	2C24	Ⅰ	B2	5.20	4.10	0.77	8.4	79	
67	不定形石器	珪質頁岩 E 類	5C10	Ⅰ	E2	4.15	5.80	0.65	11.0	39	
68	不定形石器	珪質頁岩 E 類	5C18	Ⅰ	F1	5.85	5.00	1.40	27.7	41	
69	不定形石器	珪質頁岩 E 類	4C13	Ⅰ	F1	3.95	4.05	0.95	8.6	21	
70	不定形石器	珪質頁岩 E 類	3C3	Ⅱ	Ⅰ	5.95	5.65	1.22	30.2	36	
71	不定形石器	珪質頁岩 E 類	4D3	Ⅲ	Ⅰ	5.95	3.30	1.40	20.6	7	71・72 は同一地点で出土→接合。
72	不定形石器	珪質頁岩 E 類	4D3	Ⅲ	Ⅰ	2.95	2.10	0.98	2.8	7	71・72 は同一地点で出土→接合。
73	不定形石器	珪質頁岩 E 類	4D3	Ⅲ	J	3.95	3.05	1.00	8.4	52	
74	剥片	珪質頁岩 A 類①	4C5	Ⅱ		2.45	3.05	0.66	4.6	1	
75	剥片	珪質頁岩 A 類②	4C16	Ⅱ		7.15	5.70	2.05	49.9	58	
76	剥片	珪質頁岩 A 類③	4C16	Ⅲ		4.20	4.15	0.61	10.3	55	
77	剥片	珪質頁岩 B 類①	4C16	Ⅲ		5.70	2.40	0.65	7.3	87	
78	剥片	珪質頁岩 B 類①	試掘 24T	Ⅲ		0.50	0.80	0.01	0.1	－	
79	剥片	珪質頁岩 B 類②	1C25	Ⅰ		8.25	4.85	1.25	38.2	80	
80	剥片	珪質頁岩 B 類②	4C16	Ⅳ		4.80	5.00	1.32	18.3	64	
81	剥片	珪質頁岩 B 類②	3C12	Ⅰ		4.70	2.65	0.73	6.1	27	
82	剥片	珪質頁岩 B 類②	5A16	Ⅰ		3.50	3.65	0.55	5.9	84	
83	剥片	珪質頁岩 B 類②	3C17	Ⅰ		2.75	1.45	0.44	1.6	29	
84	剥片	珪質頁岩 C 類	4C13	Ⅲ		7.10	3.00	1.00	13.8	68	
85	剥片	珪質頁岩 C 類	4C13	Ⅲ		6.00	3.10	0.91	9.2	56	
86	剥片	珪質頁岩 C 類	4C16	Ⅲ		3.00	2.40	0.44	2.3	65	
87	剥片	珪質頁岩 D 類	3C14	Ⅳ		4.10	3.50	0.48	5.6	26	
88	剥片	珪質頁岩 D 類	4C11	Ⅰ		3.50	1.25	0.70	2.5	19	
89	剥片	珪質頁岩 D 類	1C5	Ⅳ		3.40	3.40	0.84	8.5	81	
90	剥片	珪質頁岩 D 類	5B1	Ⅰ		3.40	3.00	0.40	2.8	77	
91	剥片	珪質頁岩 D 類	4C18	Ⅱ		3.05	2.90	0.45	4.5	14	
92	剥片	珪質頁岩 D 類	5A22	Ⅰ		2.25	3.00	0.62	4.6	74	
93	剥片	珪質頁岩 E 類	4B22	Ⅳ		7.25	3.90	1.13	27.4	89	
94	剥片	珪質頁岩 E 類	4C19	Ⅲ		7.05	4.25	1.39	26.1	53	
95	剥片	珪質頁岩 E 類	2B23	Ⅳ		6.80	2.15	0.95	11.5	83	
96	剥片	珪質頁岩 E 類	4C17	Ⅲ		5.15	1.75	0.36	2.9	85	
97	剥片	珪質頁岩 E 類	4C23	Ⅲ		5.10	2.85	1.05	11.3	4	
98	剥片	珪質頁岩 E 類	4D11	Ⅱ		4.85	4.50	0.90	14.0	31	
99	剥片	珪質頁岩 E 類	4C15	Ⅰ		4.65	3.00	0.70	6.7	2	
100	剥片	珪質頁岩 E 類	5C12	Ⅲ		4.50	6.50	1.70	35.2	72	
101	剥片	珪質頁岩 E 類	4C1	①		2.25	1.60	0.36	0.9	43	
102	剥片	珪質頁岩 E 類	4D2	Ⅱ		2.15	1.55	0.38	0.9	16	
103	剥片	流紋岩質凝灰岩	4C16	Ⅱ		6.55	4.45	1.05	13.7	57	103・104 が接合。
104	剥片	流紋岩質凝灰岩	4C16	Ⅲ		2.90	2.05	0.80	2.2	60	103・104 が接合。
105	剥片	チャート	4C23	Ⅲ		4.25	3.70	0.87	10.0	34	
106	石核	珪質頁岩 E 類	4C19	Ⅱ		3.95	4.55	2.21	28.2	32	

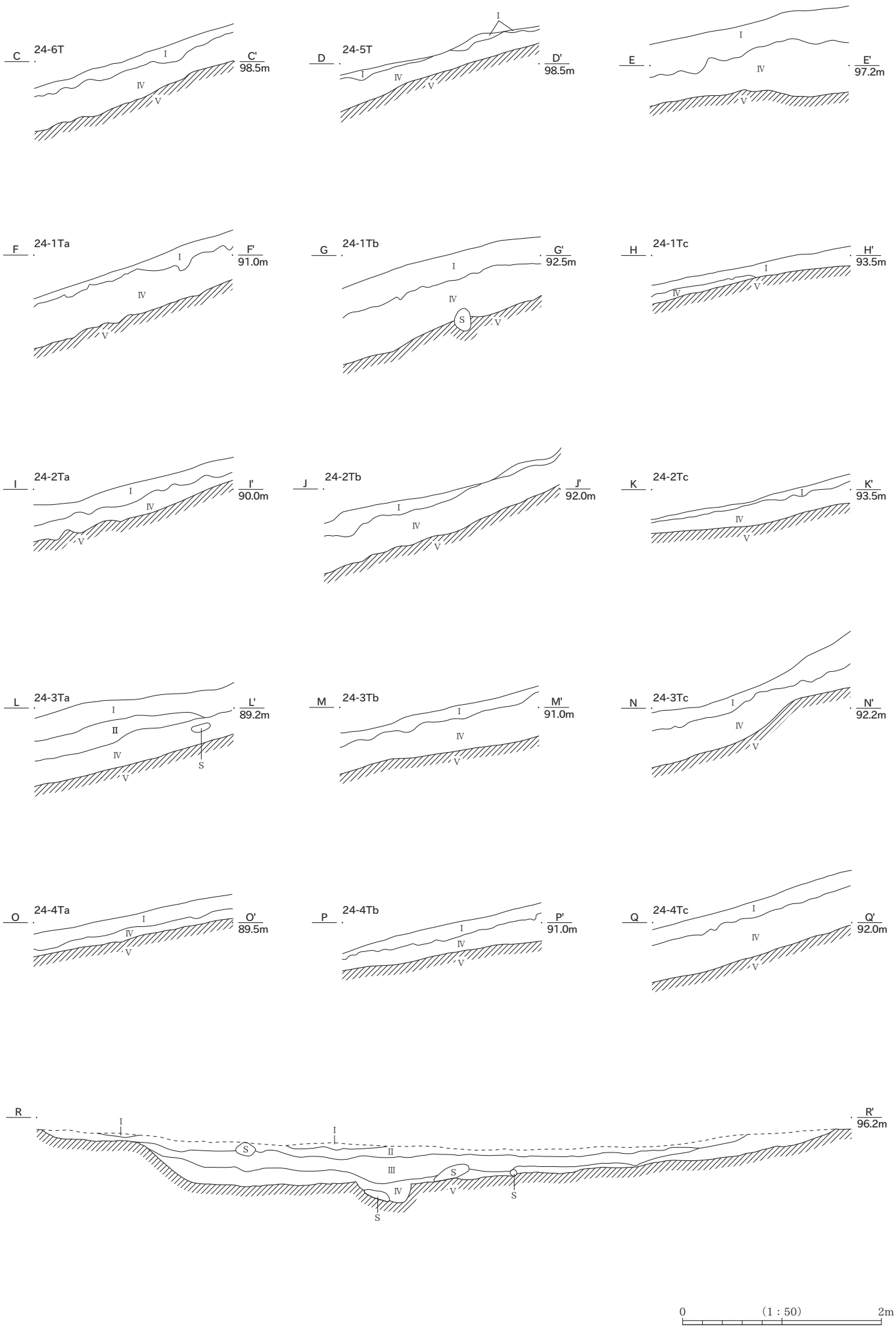
図　　版

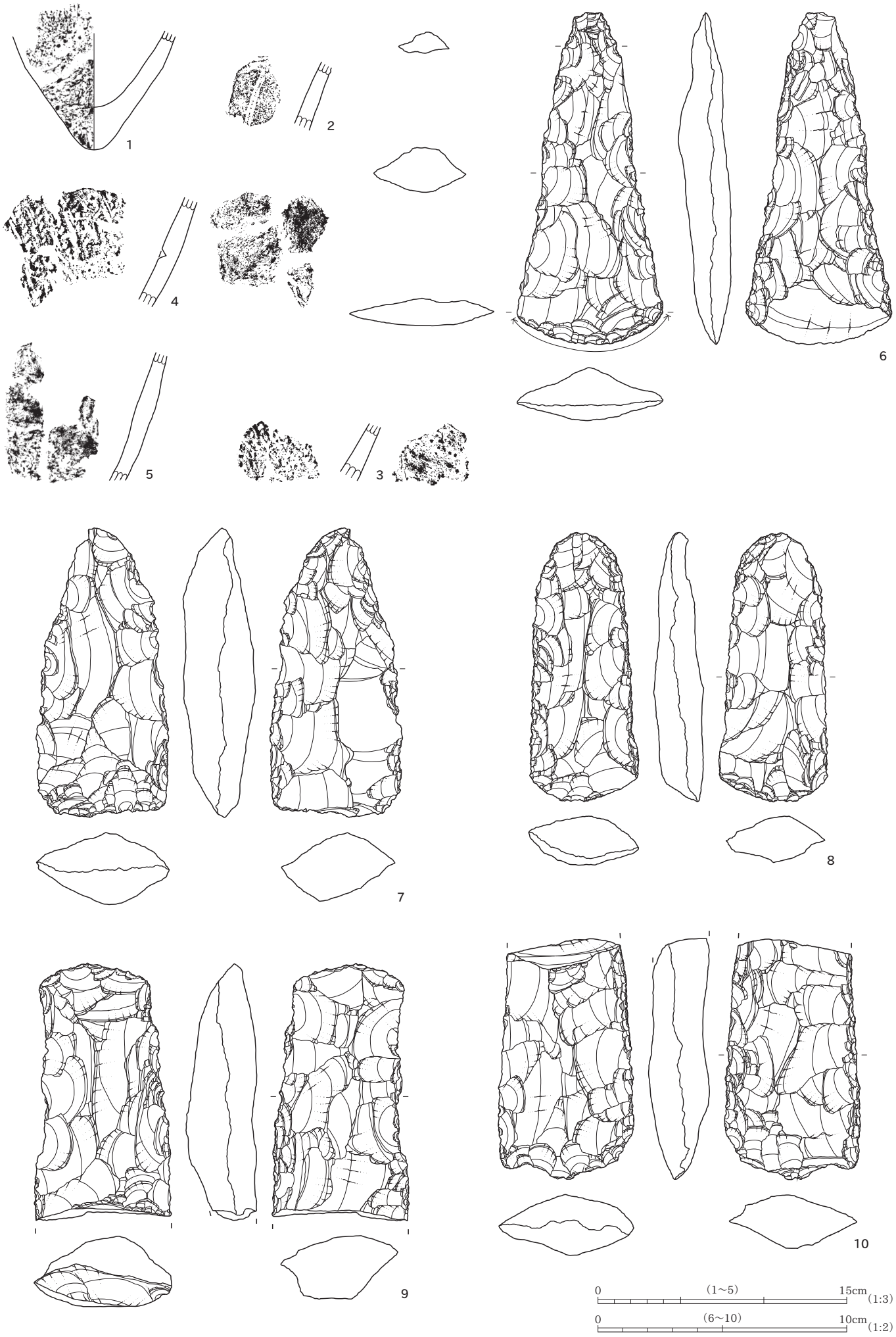

A
B
C
D
6B
6C
6D
5
5B
5C
5D
4
4B
4C
4D
3
3B
3C
3D
2
2C
2D
1
100.00m
99.00m
98.00m
97.00m
96.00m
95.00m
94.00m
93.00m
92.00m
91.00m
90.00m
89.00m
15+33
29+38
0
(1 : 200)
10m

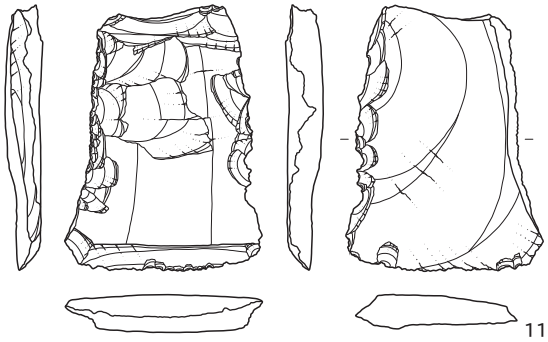


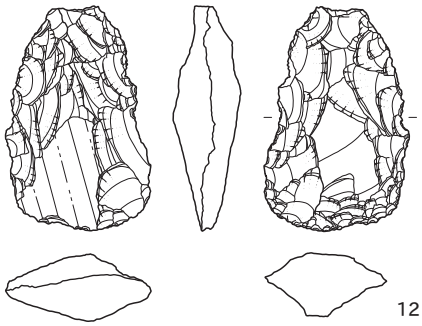
Ⅰ　黒色腐葉土　2.5Y2/1　表土。草木根多し。粘性・しまりなし。遺物包含層。
Ⅱ　褐色土　7.5YR4/4　粘性なし、しまり有。遺物包含層。
Ⅲ　黒褐色土　7.5YR3/2　炭化物少量混入。粘性なし、しまり有。遺物包含層。
Ⅳ　褐色土　10YR4/4　場所により層厚が異なる。５～15cm大の風化礫を多く含み、特に谷筋では層表に露呈する。粘性やや有、しまり強。遺物包含層。
Ⅴ　にぶい黄褐色土　10YR5/4　縄文時代の基盤層。場所により土色の濃淡がみられる。凝灰岩・砂岩・泥岩などを多量に含む。粘性やや有、しまり強。
①　灰黄褐色土　10YR4/2　礫を少量含む。粘性・しまり有。風倒木に伴うものか。

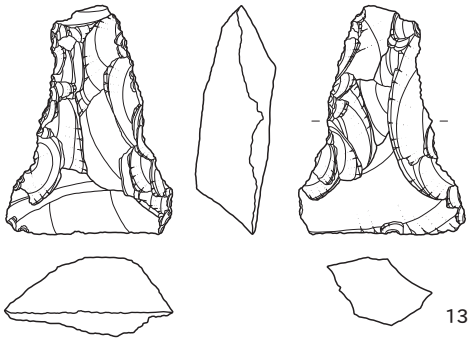
0　(1：40)　2m

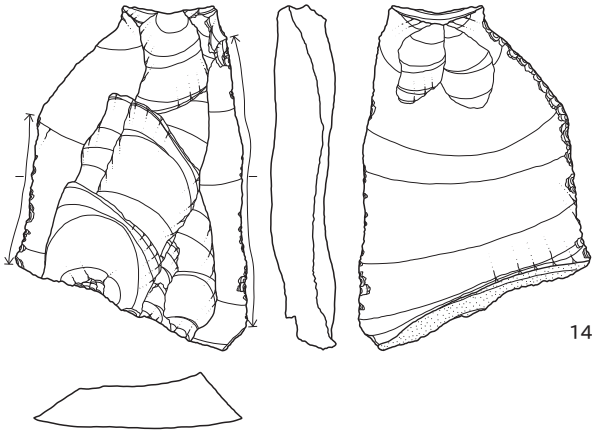

C 24-6T C' 98.5m
D 24-5T D' 98.5m
E E' 97.2m
F 24-1Ta F' 91.0m
G 24-1Tb G' 92.5m
H 24-1Tc H' 93.5m
I 24-2Ta I' 90.0m
J 24-2Tb J' 92.0m
K 24-2Tc K' 93.5m
L 24-3Ta L' 89.2m
M 24-3Tb M' 91.0m
N 24-3Tc N' 92.2m
O 24-4Ta O' 89.5m
P 24-4Tb P' 91.0m
Q 24-4Tc Q' 92.0m
R R' 96.2m
I
II
III
IV
V
S
0 (1 : 50) 2m

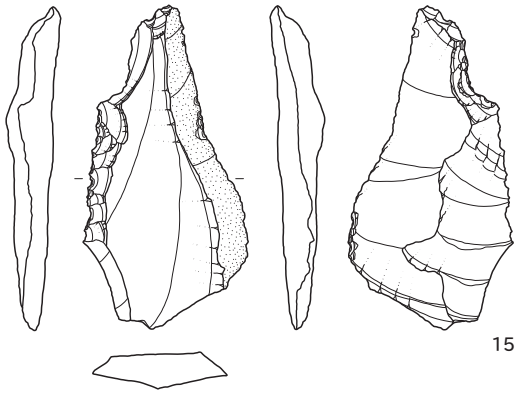

1
2
4
5
3
6
7
8
9
10
0
(1～5)
15cm
(1:3)
0
(6～10)
10cm
(1:2)

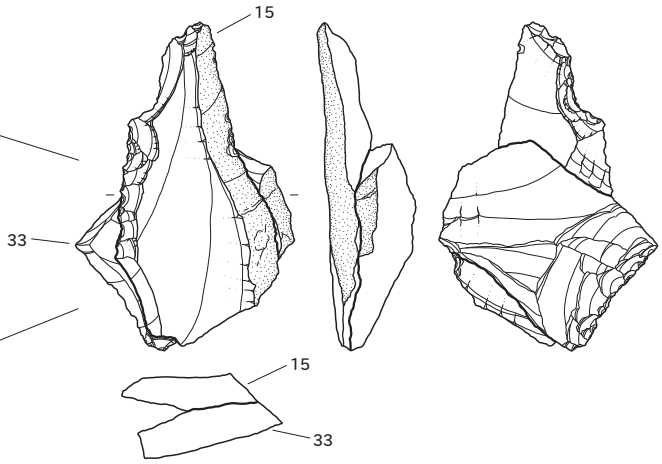


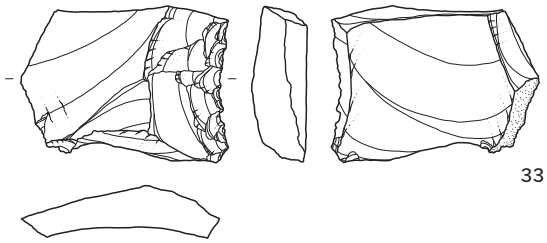


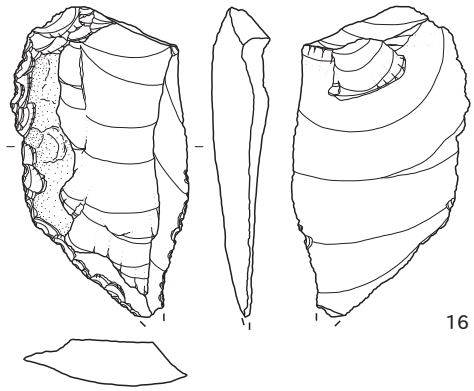


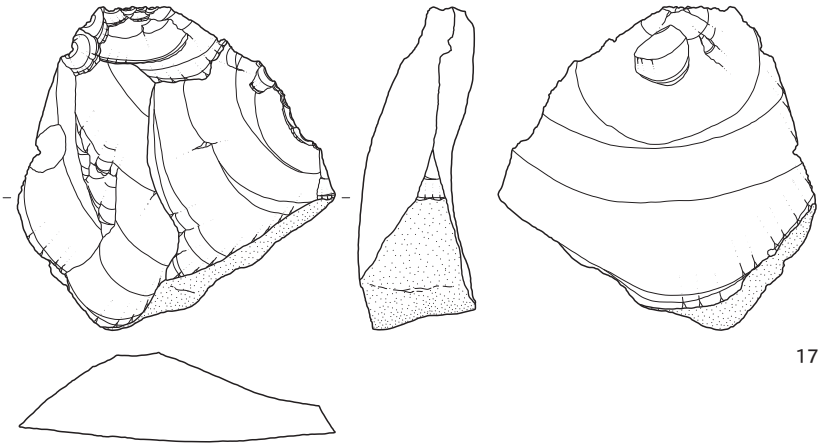




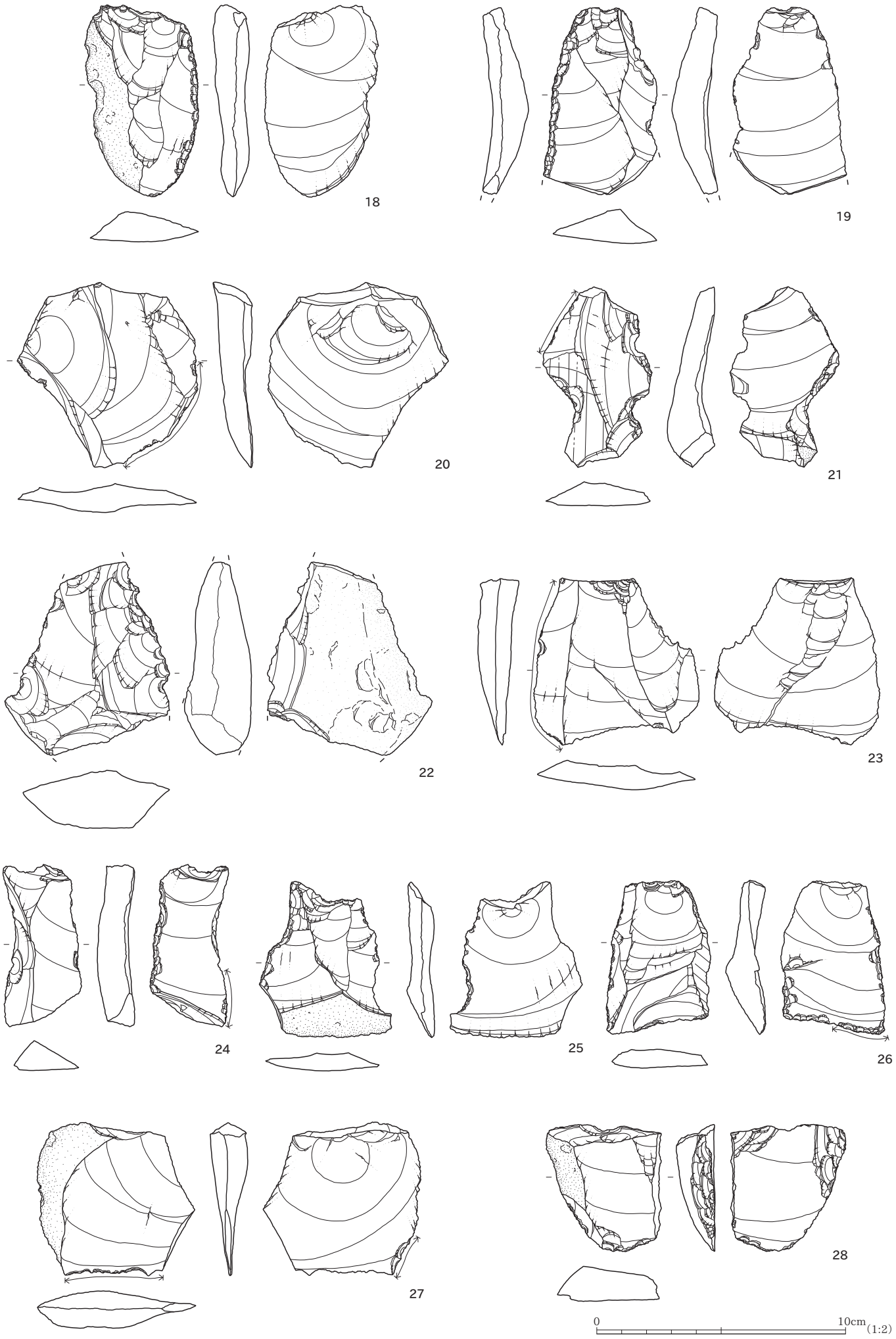








0　10cm（1:2）


18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm
(1:2)

29
30
29
38
38
29
32
38
34
35
光沢
31
36
37
39
41
40
敲打痕
磨　面
0
(29～39)
10cm
(1:2)
0
(40・41)
15cm
(1:3)

全　景（東から）

篦状石器

調査前全景（伐採前　東から）

調査前全景（伐採後　東から）

作業風景（南から）

近　景（東から）

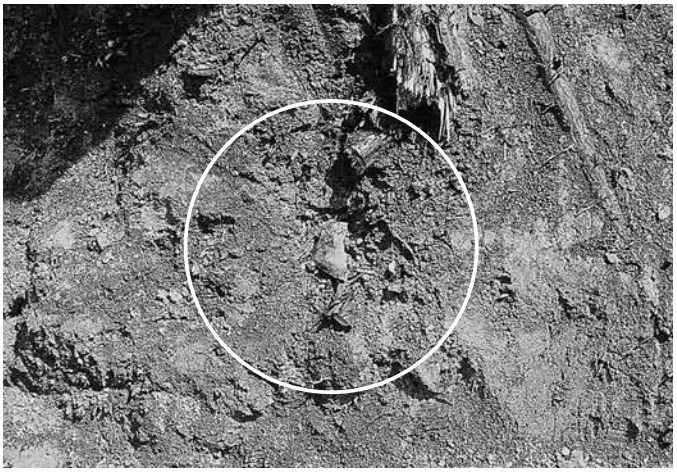
全　景（東南から）

全　景（西から）

調査区中央完掘（南西から）

3・4C グリッド完掘（西から）

3・4B グリッド完掘（西から）



剥片出土状況（北から）

不定形石器（図版 7-29）出土状況（西から）

東西ベルト基本層序（3B21 グリッド　南から）

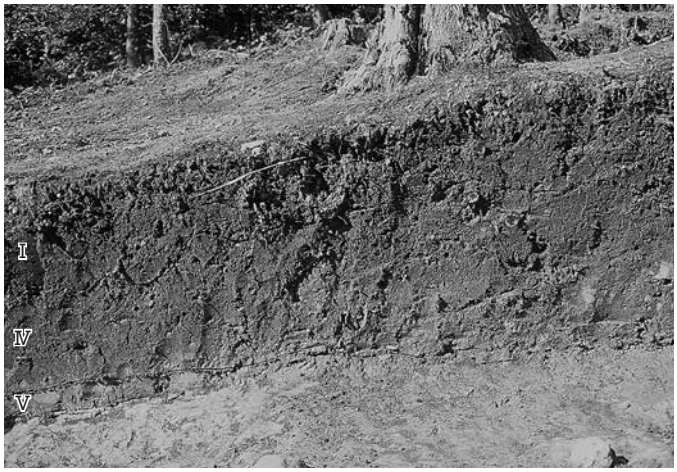
東西ベルト基本層序（4B21 グリッド　南から）

東西ベルト基本層序（5B21 グリッド　南から）

東西ベルト基本層序（5B24・25 グリッド　南から）

24-6T 基本層序（5B12 グリッド　南から）

24-5T 基本層序（5A21・22 グリッド　南から）



調査区北壁基本層序（4B3・4 グリッド　南から）

24-1T a 基本層序（2B3・4 グリッド　南から）

24-1T b 基本層序（2B1 グリッド　南から）

24-1T c 基本層序（1B4 グリッド　南から）

24-2T a 基本層序（2B19・20 グリッド　南から）

24-2T b 基本層序（2B17・18 グリッド　南から）

24-2T c 基本層序（1B19 グリッド　南から）

24-3T a 基本層序（2C4・5 グリッド　南から）

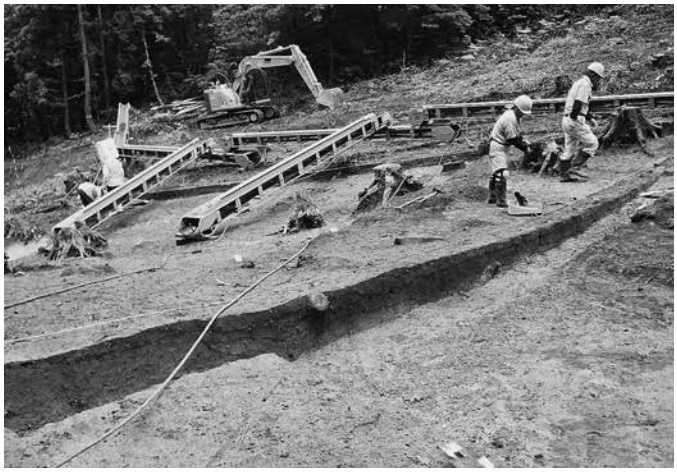
24-3T b 基本層序（2C1・2 グリッド　南から）

24-3T c 基本層序（1C3・4 グリッド　南から）

24-4T a 基本層序（2C24・25 グリッド　南から）

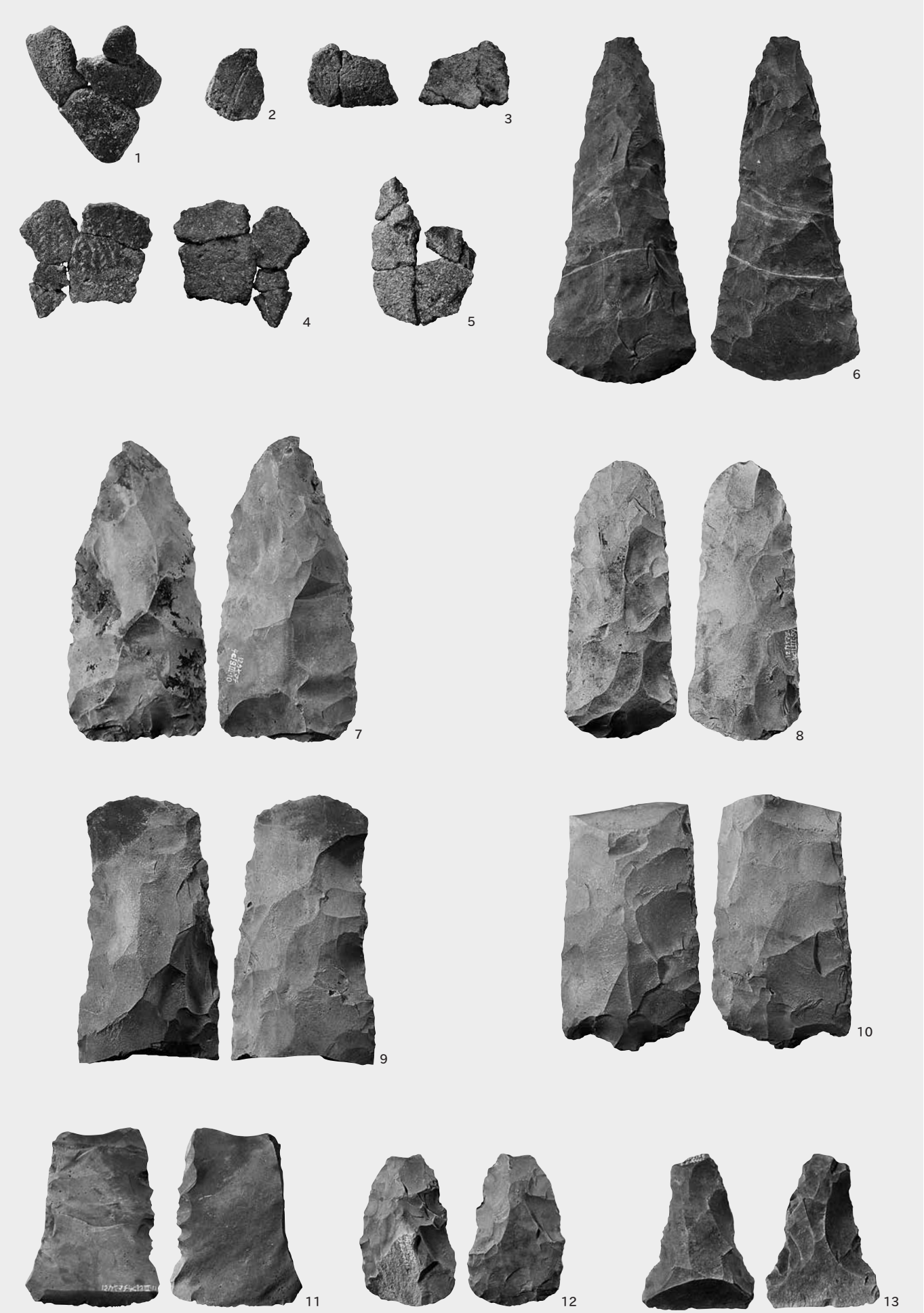
24-4T b 基本層序（2C21・22 グリッド　南から）

24-4T c 基本層序（1C23・24 グリッド　南から）

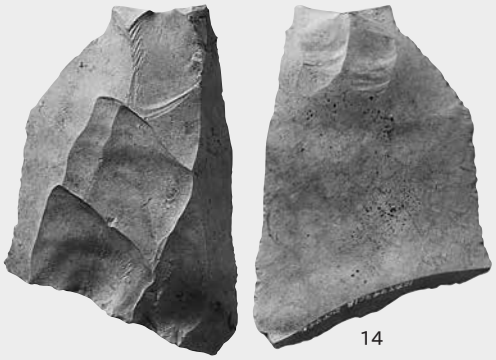


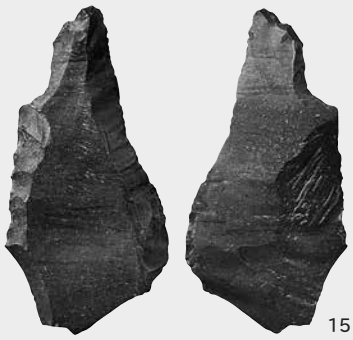
南北ベルト基本層序（東南から）

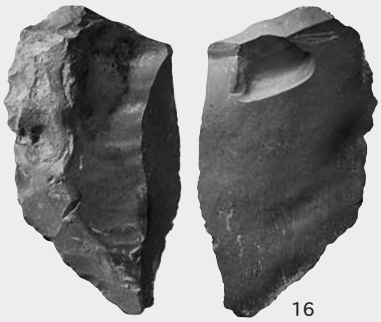
南北ベルト基本層序（24T 西壁部分　東から）



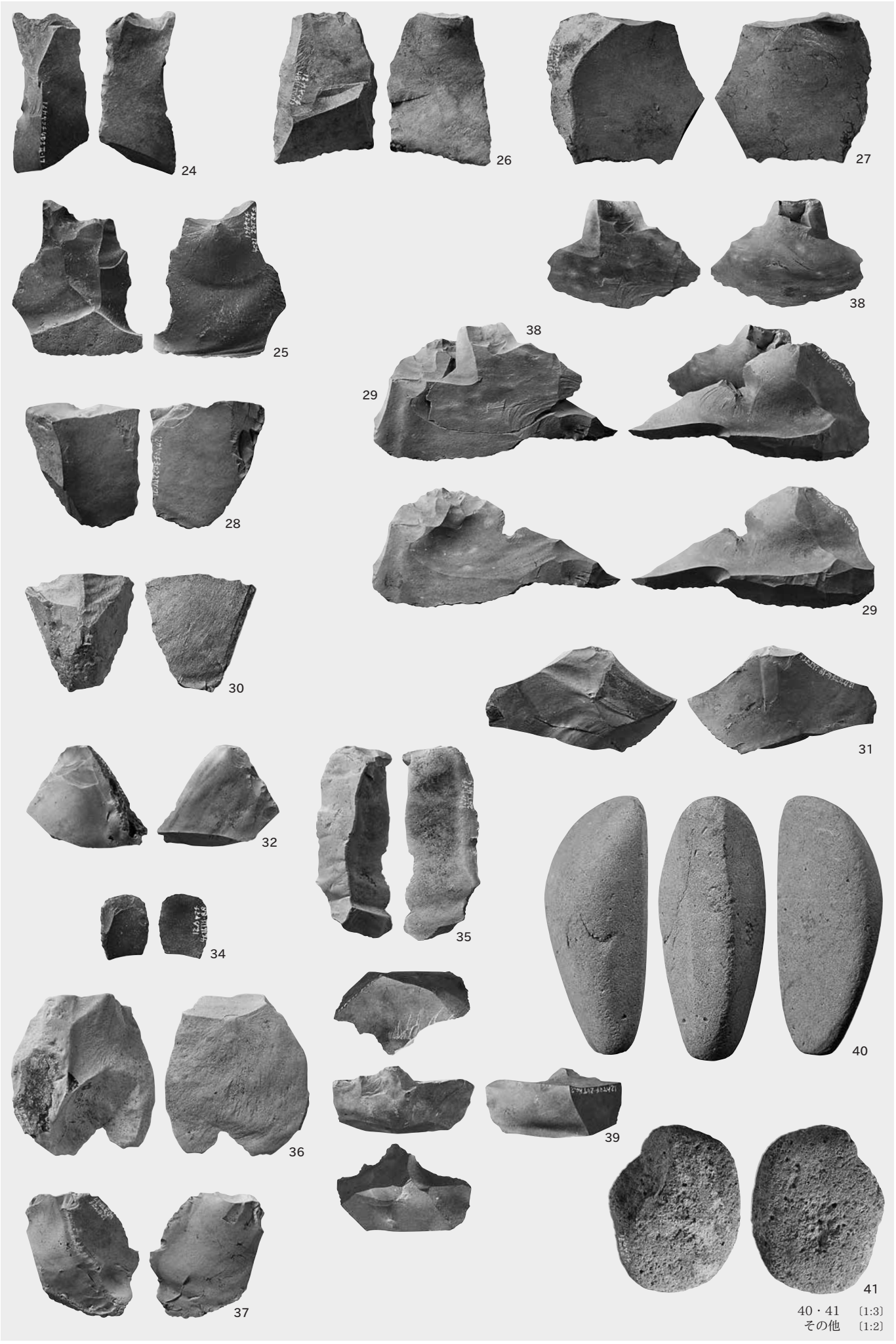
1～5　〔1:3〕
その他　〔1:2〕







全て　〔1:2〕



40・41　〔1:3〕
その他　〔1:2〕

報告書抄録

ふりがな	かやまちいせき
書名	カヤマチ遺跡
副書名	一般国道113号鷹ノ巣道路関係発掘調査報告書
巻次	Ⅰ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第243集
編著者名	継　実・白井雅明（藤村ヒューム管株式会社）、佐藤友子（新潟県埋蔵文化財調査事業団）
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地1　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2013（平成25）年3月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
カヤマチ遺跡（いせき）	新潟県岩船郡関川村（にいがたけんいわふねぐんせきかわむら） 大字片貝（おおあざかたがい）	15581	117	38度 03分 58秒	139度 37分 15秒	20120618～ 20120918	715	道路（一般国道113号鷹ノ巣道路）建設

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
カヤマチ遺跡	遺物包含地	縄文時代早期		縄文土器・石器	縄文時代早期後葉の土器と石器が出土。 遺跡は一時的な野営地と考えられる。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第243集
一般国道113号鷹ノ巣道路関係発掘調査報告書Ⅰ

カヤマチ遺跡

2013(平成25)年3月28日印刷
2013(平成25)年3月29日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950－8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956－0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒950－2022　新潟市西区小針1丁目11番8号
電話　025（233）0321

正　誤　表

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第243集「カヤマチ遺跡」の編集・製作において訂正が生じました。修正してお詫び申し上げます。

誤）本文　14頁　第Ⅳ章　遺物　2）不定形石器　**第2表　不定形石器分類表**

以下の表に訂正致します。

分類	刃部形状	刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離	——	縦長	側縁と端部	A1類
			横長	片側縁と底縁	A2類
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離	外彎状	縦長	片側縁と端部	B1類
			横長	底縁	B2類
C類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離	直線状	縦長・厚手	片側縁	C1類
			横長・厚手	底縁	
		内彎状	縦長・厚手	片側縁	C2類
			横長・厚手	底縁	
		外彎状	縦長・厚手	片側縁	C3類
			横長・厚手	底縁	
	スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形	——	厚手	——	C4類
D類	鋭利な尖端部をもつ石器 大型・急角度剥離	直線状	厚手	片側縁 （一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する。）	D1類
		内彎状	厚手		
	大型・浅角度剥離	直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D2類
				両側縁	
		内彎状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	
				両側縁	
	小型剥離	直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D3類
		内彎状		両側縁	
		直線状	薄手	両側縁	石錐
		内彎状			
E類	抉入石器（ノッチ） 大ノッチ 大型・中型・急角度剥離	内彎状	横長・厚手	側縁	E1類
			横長・厚手	底縁	
	大型・中型・浅角度剥離		縦長	側縁	
			横長	底縁	
	小ノッチ 中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側縁	E2類
			横長	側縁・底縁	
	小型剥離		縦長	側縁	
			横長	側縁・底縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離	——	縦長	側縁	F1類
		端部に丸味	縦長	側縁と端部	F2類
		——	横長	底縁	F3類
				側縁	
				底縁と側縁	
G類	大型・中型・浅角度剥離	直線状	縦長	側縁	G類
			横長	底縁	
		外彎状	縦長	側縁	
			横長	底縁	
H類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕） 小型・浅角度剥離	外彎状	背面は自然面 横長	底縁	H類
I類	端部に小型・連続剥離	端部に丸味	縦長・薄手	端部	I類
			横長・薄手		
J類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）	——	縦長	側縁	J類
			横長	側縁・底縁	
K類	両面加工（調整）石器 （刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状）	外彎状	薄手		K類

※ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

第2表　不定形石器分類表［鈴木ほか1996］